
いつか.....

出口 常葉

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

いつか……

【Nコード】

N5244D

【作者名】

出口 常葉

【あらすじ】

古書店「満月堂」でバイトしている藍沢裕也。静かな冬を過ごしていたある日、女の子が本を売りに来る。本の間から落ちた桜の葉を手にしたときから、ゆっくりと裕也の冬は賑やかさを見せ始める

いつか……

第一話（前書き）

僕の好きな世界観と言いますが、まったりとした作品になっています。

いつか……

第一話

冬は日々深まり、寒さが厳しくなってきた。後一月ほどでクリスマス。街角の古本屋にはあまり関係がない。

俺は足元に置いたストーブで爪先を暖めながら、のんびりと読書にくれていた。ドアの外はクリスマス一色だろう。商店街の雰囲気作りの一環と言うことで、うちの入り口にも誰かがリースをかけて行った。

どうでもいいけど、店の雰囲気にはそぐわない事この上ない。何しろ、そのすぐ隣のショーウィンドウに並んでいるのは、小杉天外の全集だ。こんな珍品、誰が買うんだろうか。それ以前に、この店にはあんまり客が来ない。だからこそ、こうして落ち着いて読書もしていられるわけなのだが。

不意に店のドアが開いた。リースについている安物の鈴がちりりと音を立て、同時に冷たい空気が流れ込んでくる。俺は読んでいた本を一応閉じた。

「いらつしゃいませ」

勤めて落ち着いた声でそう一言。それから客のほうに視線を送る。珍しいこともあるもので、入ってきたのはうら若い女の子だった。戸口を入ったところで、呆然とこちらを見つめている。

黒いフリースにブルーのジーンズという出で立ちは、クリスマスにトチ狂った商店街にはイマイチ似合っていない感じだ。段ボール箱を二つほど重ねて括りつけたカートが足元に置かれている。見かけによらず力持ちなのだろうか。

「あの、何か？」

俺の言葉にふと我に返った女の子は、慌ててレジカウンターのところ近づいてきた。

「あの、買取りをお願いしたいんです」

そう言った声は見た目どおりの弱い感じだった。

いつか.....

「ああ、はいはい。ちょっとお待ちくださいね」

俺はそう言ってから、背後の引き戸を開けて店の奥に向かって叫んだ。

「白井さん」

ガタン、ゴトンという何かがひっくり返るような音がした。うむ、また転寝とかしていたに違いない。

バタバタと足音も慌しい。襖ががらりと開いて、引き戸のすぐ向こうにあった和室に白井さんが現れた。適当に整えたらしい皺だらけの服。手で髪の毛をなでつけながら白井さんは店のほうに出てきた。ほっぺたにはきつちり赤い腕のあとがついている。

どう見ても、小汚いおっさんだ。やれやれ、これが客商売をする者の姿だろうか。

「はいはい。お待たせしました」

「買取りだそうです」

そう言っただけはカートに括りつけられた段ボール箱を指差した。

「はいはい、それじゃあ失礼しますよ」

そう言いながら、白井さんは箱をカートから外して中を覗き込んだ。

「家の物置から沢山出てきたんです」

女の子が言うとおり、随分と古い装丁の本が箱の中には入っていた。

白井さんは本に熱中し始めたらしく、女の子の言葉が一瞬宙に浮いた。それを拾うのは当然俺の仕事だ。

「重かったでしょう」

「はい、流石に。それに商店街が賑やかだから……歩き辛くて困ったような笑顔で女の子はそう言った。さもありません。

「それにしても結構な量だ。お客さんの本ですか？」

「いえ。多分、祖父のだと思うんですけど。もう誰も読まないからつて」

確かに、読まなくなった本は、下手をすればただの埃製造機だ。

いつか……

場所も取るし、処分したい気持ちは良くわかる。捨てるわけではなく、古書店に売り払えば次の持ち主が出てくる可能性もあるわけだから、罪悪感もそれほどわからない。おまけにお金まで貰えるのだ。大体の場合は極々小額に終わるけど。

「父が、適当に詰めちゃって。バラバラかも」

「ああ、そこで熱心に本の品定めしている人は、そんなの気にしないから大丈夫です」

俺がそう言うと、女の子は少し安心したように胸をなでおろした。「結構状態がいいですねえ。これなら買い取れる」

「あ、良かったあ」

もう一度カートを引きずって戻ってくる必要がなくなったからだろう。その気持ちは良くわかる。本が詰まった箱はデタラメに重いものだ。

「それじゃあ、ここに必要事項を」

そう言って、俺は買取り用紙とボールペンを彼女に差し出した。カウンターを台にして、そこにさらさらと書き込んでいく。綺麗な字だった。何となく覗いて見ると、住所はすぐ近くだった。

「赤城 碧」

名前の欄にはそう書かれていた。

「はい」

書き終えた彼女は、それをこちらに差し出してきた。

「はい、結構です」

内容を確認して俺がそういうと、白井さんがトレーに現金を乗せてカウンターの上に乗せた。

「どうも、ありがとうございました」

白井さんが精一杯の愛想でそういうと、彼女も微笑んで会釈をした。可愛らしい笑顔だ。

「また、どうぞ」

軽くなったカートを引きながら、出て行く背中に俺も声を掛けた。すると、店を出際に律儀にこちらに向かって会釈してくれたではな

いつか……

いか。引き止めてしまったようで、こちらが申し訳ない。今時に珍しい丁寧な子だ。

「白井さん、ほっぺた」

「え、何かついてた？」

「腕のあと。また寝てたでしょ」

俺の指摘に「うっ」と呻きながら苦笑いを浮かべる白井さん。

「昨日、遅くてねえ」

「それでも、営業中に店長が転寝ってのはどうかと思いますけど」

「いやあ、ほら、藍沢君が頼りになるから……」

罪悪感はあるのだろうが、それでもこういう無責任なことを平気で口にするのが白井さんの凄いところだ。いや、凄いのか？

いつか……

第二話

古本屋「満月堂」は随分古くから続いている古本屋らしい。なんでも、曾お爺さんが開業したらしいので、下手をすれば百年単位で続いていると言う事になる。昔は常連が沢山いて、割と賑わっていたらしいけど、最近はインターネットで小説も読めるとかで、本を売る人も買う人も減って来ているらしい。そのせいだけではないだろうけど、商売のほうは大して儲かっていない。売り上げがゼロの日とか普通にある。それでも俺なんて雇っている余裕があるのは、白井さんのもう一つの顔のおかげだ。

月夜満と言う名前で小説を書いているのだ。単行本も何冊か出しているし、文芸雑誌で連載も持っている。単行本は一通り読ませて貰っているが、どれも優しい雰囲気を持った暖か味のある作品ばかりで、読むとほっとする。

そんな二重生活のせいだけではないだろうけど、身の回りについては恐ろしく無頓着だ。

「それはそれとして、藍沢君、お茶……欲しいなあ」

それは単なる横着だな。まあいいけど。

俺はカウンターに白井さんを座らせて、和室に上がった。ちゃぶ台に和筆笥と恐ろしく昭和な部屋だ。その部屋の片隅には書き物机があつて、そこにはパソコンが一台置かれている。型遅れの代物だけど、この部屋にあると妙に近代的な設備に思える。一応店の出納用にと言うことなのだが、これを使う意味があるのか、と思うほどに客は来ない。

ちゃぶ台の上に置かれているポットからお茶葉を入れた急須にお湯を注いで、湯飲みにお茶を二つ入れ、それをもつてもう一度店内に出る。

「はい、どうぞ」

「ああ、悪いねえ」

いつか……

受け取っておいしそうに一口飲む白井さん。そのまま白井さんは湯飲みを持って和室に上がった。俺は入れ替わりで再びカウンターの椅子に腰掛けた。

「相変わらず、夜は遅いんですか？」

「て言うか、もう朝だからねえ、寝るのが」

夜の方が筆が進む、とはいっぞや白井さんが言った戯言だ。

「この店、ずっと続けるんですか？」

「うん、続けたいなあ。せつかく続いてるし……」

「体、壊しませんか？」

「前はしんどかったけど、今は藍沢君が来てくれるから随分楽だよ。面と向かってそういわれると、ちょっと照れる。

「でも、大して儲かってないでしょう？」

「まあね。でも、どうせ土地は僕のものだから、まあ、趣味みたいなものかなあ。親の残してくれた形見みたいなものだしねえ」

そう言いながら、感慨深げに店内を眺める白井さん。そうしていると、落ち着いた人という感じがする。若作りだけど、年を聞いたらうちの親父より少し若いだけだったのには吃驚した。先代店主だった白井さんのご両親は、白井さんが随分と若い頃に無くなったらしい。

「確かに、いい店ですよ。俺も好きですよ、この店」

「そう言ってくれると、嬉しいよ」

何となく言った俺の台詞に、白井さんはにっこりと笑った。それからお茶をもう一口飲んだ。

「そういえば、藍沢君の休みはいつまでだったかな」

「来年の春までです」

「大学は長いよねえ、休みが」

「ええ、お蔭様で暫くはここに来れますよ」

大学が始まって、恐らく大半の日はここに来るけど。他にやることも無いし。

「クリスマスの予定は無いの？」

いつか……

「それは、そつくりそのままお返ししますよ」
「うっ、参ったなあ」

白井さんは独身だ。この反応だと、クリスマスも予定が無いらしい。まあ、俺もだけど。

「さて、それじゃ目も覚めたし、続きを書こうかなあ」
あ、逃げた。

「何かあったら呼んで。それと、ダンボールの中身、適当につんどいて」

「またですか。随分溜まってきてますよ」

買い取って未整理のまま放置されている本の数は、結構なものになってきていた。

「そつだねえ、そろそろ整理しないとねえ。でも、店内の置き場も空気がないしねえ」

白井さんの言葉に俺は店内を見回してみた。本棚も、足元の平積みも限界と言う気がする。

「まあ、今のところはそこに置いておいてよ」
そう言つて、白井さんはレジ横の未整理本の山を指差した。

段ボール箱を開けると、古臭い臭いがつんと漂ってきた。確かに綺麗が、目に見えない埃が充満しているのは間違いない。俺は念のためにマスクをつけて、それから作業を始めた。

「ちわつすう」

作業をしていると、ドアの開閉音と共に脳天気な声が店の中に飛び込んできた。

「いたいた、裕也、春休みはエンジョイしているかな？」

「仕事中だ」

振り返るまでも無い。こんな脳天気な声で俺に語りかけてくるのは明良だけだ。

「冷たいなあ」

「背中に「の」の字を書くな！！気持ち悪い」

いつか……

「あのさ、話があるんだけど」

人の話を聞かないのは、明良の大いなる欠点の一つだ。

「何だよ？」

俺は諦めて振り返る。明良は男としては随分と小柄だ。あの体のどこからあんな元気が出ているのだろうか。パーカーにジーンズといかにも軽装で現れたということは、案外暇なんだよ、と言いつつもかもしれない。言い出したら殴ろう。そう心に決めた。

「あのさ、今度の土曜日は暇でしょ？」

殴らずに済んだようだ。

「ここで働いているな」

「わああ、勤労青年って素敵。けど、働きすぎは体に毒だよ？」

「簡潔に言え。仕事中だ」

「分かったよ、たく融通が利かないんだから」

ぶつぶつと愚痴を垂れる明良。

「お帰りは真後ろだが？良かったら力づくで案内してやろうか」

「やめてよ。言うから。茜ちゃんがさ、食事をしたいんだって」

茜ちゃんと言うのは、明良の彼女だ。明良に負けず劣らず脳天気と言うか、明るいので二人揃うとなかなかにかまましい。確か二つほど年下だったかな。

「食事会？」

「そう、茜ちゃんの友達と四人で」

「友達って、茜ちゃんと同じ大学の？」

「そう、大学だけじゃなくて、結構長い付き合いの友達なんだって」
「なんでまた」

「うーん、詳しくは聞いていないんだけど、元気付けてあげたいから見たいな事を言ってたかな」

「えらくアバウトだな」

しょっちゅう合っているくせに、なんでそんなにざっくりしか知らないんだろうか。いつもどんな会話をしているのやら。

「まあ、騒ぎたいとかそういう理由で無いなら別に構わないけど、

いつか……

何で俺だ？」

「ああ、うん、そりゃあ僕の親友だからさ」

と言っている明良の目は完全に泳いでいた。成程、急な予定で都合のつく人間が見つからなかったということか。大学一年のときからの付き合いだから、彼は三年。さすがに分かる様になって来た。

「まあいいさ。白井さんに聞いとく」

「頼むよ。裕也が最後の砦なんだ」

「やっぱりそうか」

「あ……」

しまったとばかりに一瞬素の顔になる。別にいいけどな。

「さ、用が済んだら帰れ。白井さんの了解が取れたら電話する」

「うん、よろしく」

さすがに気まずいと思ったのか、明良は素直に引き上げて行った。やれやれ、あいつが来ると仕事が進まない。

本を全部取り出し、何となくそれを選別していると、一冊だけ随分新しい本があった。

「趣味の園芸」

見間違っことのない、分かり易いタイトルの本だ。これはあからさまにお爺さんの物なんだろうけど、随分と新しいなあ。奥付も一年前の日付だ。ぱらぱらと捲っていると、ぼとりと何かが落ちてきた。

「ん？」

拾い上げてみると、一枚の葉だった。桜の押し花を貼り付けた紙に丁寧なセロファンが巻かれている。丁寧な仕事をしているが、明らかに手作りの葉だ。

第三話

「ふうん、こいつはなかなかいい栞だねえ」

本を片付けた後、俺は白井さんと呼んで、さっきの栞を見せた。

和室のほうでお茶を飲みながら、白井さんはそう言った。

「たまにあるんだ、こういうのは」

「そうなんですか」

「本に挟んで忘れちゃうんだろうねえ。特にあんまり読まれない本
の間に秘密を隠していたらそのことを忘れちゃうとかね」

「へえ」

「まあ、殆どの人は取りに来ないけどね」

「そうなんですか」

そうそう、と頷きながら白井さんは俺に栞を返した。

「まあ、それも大事なものなら取りに来るだろう。とりあえず置いといてよ」

「分かりました」

俺は栞を受け取って、とりあえずレジと横の文具立ての間に挟んでおいた。

「そういえば、君はその花が何か知ってる？」

「え、桜でしょう？」

「それじゃあ、五十点かな」

悪戯っぽく笑ってそう言うてから、白井さんは残りのお茶を飲み干して立ち上がった。

「さて、仕事の続きでもしようかなあ」

「あ、ちよつと待ってくださいよ。五十点でどういことですか」

「まあ、少し考えてごらん。暇つぶしにはなると思っよ」

「考えて分かるんですか？」

「ここは腐っても本屋だよ。調べてみたまえ」

冗談めかしてそういいながら、白井さんは和室を出て行った。や

いつか……

れやれ、ああなるとなかなか教えてくれない。調べると言っても、この本は無造作に陳列してあるから、どこにどんな本があるのかさっぱり分からない。小さい店なのに、意外と本の量も多い。言われた通りに調べようかと思って立ち上がったけど、すぐにうんざりして止めた。また今度にしよう。俺は再び読みかけの本を手にとつて開いた。

そして夕方六時。満月堂の本日の営業は終了だ。入り口のドアに鍵をかけ、カーテンを引く。ショーウィンドウの電気を消したら、とりあえずの作業は終わりだ。

「白井さく。終わりましたよ」

「はいはい、お疲れ様でした。夕飯、食べていくだろうか？」

「……まだですか」

それは即ち、俺に作れと言っている。まあ、一人で食べるより面白から良いのだけど、男に作ってもらって嬉しいんだろうか。相手を探せばいいのに。

「カレーで良いですか」

「ああ、助かるよ」

何日食いつなぐ気なんだか。

俺はエプロンを外し、和室の隣にある台所に入った。腕まくりをして、手と顔を一応洗う。

「ああ、そういえば」

「うん」

「今週の土曜日、お休みを頂いても良いですか」

「ああ、もちろん構わないとも。随分急だね」

「ええ、さつき友達が来てどうしてもって言うんで」

「いいよ、いいよ。楽しんできてよ」

そういう白井さんの声は、妙に嬉しそうと言つか安心したような感じだった。俺を店に縛り付けているような気分になっていたんだらうか。ある程度は休みを貰った方が、白井さんの心の安心に繋が

いつか……

るのかもしれないな。変な雇い主。そう思うと、つい笑いがこみ上げてきた。

「どうかした？」

「いえ、何も」

「そう言えば、藍沢君は来年四回生だよねえ」

ふと思いついたように白井さんがそういった。

「そうですよ」

「卒論は書けそう？」

「ええ、まあ何とかなるでしょう」

「はは。藍沢君らしいね。その後は？」

「つまり、卒業後の進路ですか？うーん、具体的にはまだ何も……」

「のんびりしてるねえ。大丈夫かい？早い子は三回生からかかってくるって聞くよ？」

確かに、白井さんの言うとおり、ちらほらと就職課の建物に入っていく知り合いを見かけたことがある。

「なんか、イメージが湧かないんですねえ」

「でも、いつまでもバイトって分けにもいかないだろう？」

「そうですねえ」

俺はそれ以上何も言えず、白井さんもそれ以上何も言わなかった。夕飯を食べているときに、桜のことを聞かれたので、俺は適当にはぐらかした。白井さんはちよつと残念そうだった。

十時を廻る頃になって、俺はやつと自宅に戻ってきた。

1Kの狭いアパート。ここが、俺の城と言うわけだ。

「ただいま」

言いながら電気をつける。返事があるはずも無い。半日以上空けていた部屋の中は冷えきっていた。俺は何はともあれ風呂に入ることにした。

靴を置いて着替えを用意し、風呂の湯を溜め始める。溜まるまでに十分弱。この近代化の世の中にあつて、追い炊きすら出来ない貧

いつか……

弱な設備の風呂だが、それを言い始めたら贅沢と言うものだ。

読みきれなかった文庫本を鞆の中から引つ張り出す。風呂のお供に決定。長風呂は一人暮らしに許された数少ない贅沢。これを満喫することはまさに至福のひと時と言って過言無い。風呂で読むと本が皺になると嫌う人がいるけど、俺はあんまり気にしない。本を読むのは好きだけど、本その物の外観とかにはあんまり興味が湧かないのだ。読めればいい、とすら思う。

浴槽に体を浸すと、冷えた指先にゆっくりと血液が流れていく。それがたまらなく幸せだった。

限界まで体を湯に浸しながら、俺が読書を楽しんでいると、携帯電話の着メロが風呂場の外から流れてきた。

全く持って万死に値する愚行だ。そう思いつつ放置。暫くすると電話は鳴り止んだ。

うむむ、それで良い。

しかし、五分と経たずに再び流れ始める。後十ページぐらいで読み終わるので、何とか待って頂きたいなあ。と思いつつ、二回目も放置。そして三回目。なにやら緊急の要件なのだろうか。俺は諦めることにした。後、七ページだったのになあ。

名残を惜しみつつ風呂場から出たところで電話は切れた。

「間が悪いな」

呟きつつ、体を拭いて着替えを済ませてから洗面所を出る。

湯ききらない髪を拭きながら携帯電話の着信履歴を見ると、明良からだった。ああ、そういえばまだ連絡してなかった。悪いことをしたな。

「もしもし」

「あ、裕也！？なんで連絡をくれないのさ」

「悪いな、さつき帰ってきたところなんだよ」

嘘だが。正直に風呂に入っていたとか言つと怒りそうだし。

「まあ、いいけどさ。で、どうだったの？」

「ああ、構わないってさ」

いつか……

いつか.....

俺がそう言うと、電話の向こうから安堵のため息が聞こえてきた。

「あー、良かった。助かるよ」

「おう。で、何時にどこだ？」

「えとね、駅前に六時で」

「分かった」

その後、どうでもいい話で少し盛り上がって、電話を切ったら十
一時を廻っていた。あいつは話しが上手いせいか、喋りだすと俺も
止まらなくなる。まあ、楽しいからいいんだけど、この電話、俺か
らかけたよなあ。

反省しつつ、携帯電話を充電器に戻し、それから読み終わりがけ
の小説を読んでしまう事にした。まあ、後七ページだから、すぐだ
けど。

第四話

「それじゃ、かんぱーい」

かしゃん、と四つのグラスが打ち合わされる。俺の隣には明良。

そして、明良の向かいには茜ちゃん。その隣、つまり俺の向かいに座っているのは、驚いたことにあの赤城碧さんだった。

「驚いたなあ」

「私も……」

まるで三文小説みたいな展開だった。駅前でぼんやりと待っていたら、茜ちゃんの後ろに隠れるようにして、一緒に歩いてきたのが彼女だった。さすがに前回のようなラフな格好ではなかったが、やはり黒をベースにしたちよつと地味目の色合いで服を統一していた。長い髪の毛は後ろで三つ編みにしてぶつといお下げにしている。

対する茜ちゃんはオレンジのコートに赤のワンピースと、目立つ気満点の服装。ショートカットの耳元から覗くイヤリングにまで赤い宝石が付いていた。恐らく見失うことは無いであろう。

ちなみに、今は待ち合わせた駅から電車に乗って二駅移動した、繁華街の居酒屋に入っている。

「驚いたのはこつちだよ。初めましてと思いきや、もう裕也が唾をつけてるんだからさ」

「人聞きの悪いことを言うな。お客さんでうちの店に来たただけだ」
まだ一杯目も飲み終わっていないくせに、明良は酔っ払いのような絡み方をしてくる。

「この間は沢山売りに来てくれてありがとう」

「いえ、こちらも片付きましたから」

「何でまた、あんなに大量に？大掃除とか？」

「いえ、そういうわけじゃないんです」

「ちよつと言いつつ難そうにする赤城さん。」

「ご、ごめん、悪いこと聞いた？」

いつか……

「いえ、そういうわけではないんです」

「引越したのよ。ねえ？」

助け舟と言うか、割り込んできたのは茜ちゃんだ。

「へえ、どこに」

「あのお店の近所です。それで、引越しのときに全部持つてきちゃったから、整理していたらあの本が出てきたんです」

「そうだったんだ」

引越しか。前はどこに住んでいたんだろうか。でも、あかねちゃんと同じ大学だって言うから、そんなに遠いところじゃなからう。そんなことを考えながら、グラスを傾ける。酒を飲むのも随分久しぶりだった。

「何、内緒話？」

隣に座る管巻き小僧が再び絡んできた。俺が赤城さんと喋っている間に二杯目に突入したらしい。弱いくせに早いな。

「別に内緒話じゃ無い」

「良いですなあ、内緒話大いに結構。青春、青春」

わっはっはと笑い出す明良。ダメだこいつは。向かいを見ると、赤城さんも頬を赤くして俯いてしまっている。元気付けるのに気まぐずさせてどうする。

「でも、引越したおかげで大学、近くなったもんねえ」

「う、うん。そうだね。あ、そんなにしたらお酒こぼれるよ」

茜ちゃんが赤城さんにもたれかかる。そんな茜ちゃんにちよつと困ったような顔をしつつ、それでもいろいろと気にかけている赤城さん。

それから暫く他愛のない話が続いて、やがて明良と茜ちゃんが手を取り合って愛を語りだした。その大袈裟なやり取りが見ていて面白かったので眺めていると、ふと赤城さんが小声で話しかけてきた。

「あ、う、藍沢さん」

「うん？」

「この間売った本の中に、栞が挟まっていますでしたか？」

いつか……

そう言った赤城さんの顔は、随分と真剣だった。あの稜のことだろう。置いておいて正解だったようだ。

「ああ、あったよ」

「そ、それで、どこに」

「うん、うちの店においてある。今度、取りに来るといいよ」

「あ、はい」

そう言っただけで赤城さんの顔が、パツと明るくなる。よっぽど大切な稜なんだな。やはり連絡してあげるべきだったようだ。

「あ、そういえば、裕也さんって本、沢山読むんですよねえ」

愛の語らいは終わったらしく、突然そんなことを言い出す茜ちゃん。酔っ払い独特の唐突なタイミングに、しらふ組みは振り回されるしかないのだろうか。

「ああ、そうだけど」

「碧、読んで貰って見たら？」

「ええっ!!」

吃驚したような声を上げる赤城さん。

「裕也さん、この子、小説を書いているんですよお」

「あ、茜ちゃん……、いいよお」

慌てて口を塞ごうとする赤城さんを押さえつけ、茜ちゃんは言葉を続けた。

「読んでやって貰えないですか。私、素人だからわかんないけど、結構良い線行ってると思うんですよ」

俺も素人なのだが、人の書いた小説と言つものには興味がある。

「へえ、小説書いているんだ」

「あ、はい……」

消え入りそうな小さな声で、赤城さんはそう言っただけで頷いた。

「読ませて、貰えるの？」

「え、あ、でも、大したこと無いし、それに最近書いてないから……」

いつか……

あまり気が進まないようだ。

「ダメだよ、碧、読んで貰いなつて。読んで貰う人がいたら、きつと張合いが出るよ。また、書けるよ」

隣に座る茜ちゃんのテンションが、急にぐぐつと上がった。急にどうしたのやら。茜ちゃんは赤城さんのほうを向き直り、その手をぐつと握つて訴えかけるように言葉を紡いで行く。

俺と明良は向かいで顔を見合わせた。とりあえず成り行きを見守る以外には無いらしい。

「でも……」

「でもないよ。私、碧の小説好きだよ。大丈夫だよ、読んで笑つたりしないよ。ね？」

突然こつちに振られて吃驚したが、もちろんそんなつもりは無いので俺は頷いた。

「ほら、ね？」

茜ちゃんは赤城さんの顔を覗き込むようにしながら、訴えかけるように「ね？」ともう一度言った。

「茜ちゃん、私ね……」

「もう、一年だよ？いつまでそうしているのよ？そろそろ帰つてきてよ、碧」

「そんな事言つたつて……」

突然、赤城さんの瞳から涙が溢れた。茜ちゃんの瞳にもうつすらと涙。そのままぼたぼたと流し始めて、テーブルは急に静かになつた。

第五話

翌日の昼過ぎ、俺は相変わらず満月堂のカウンターで椅子に腰掛けていた。街のクリスマス色は日増しに色濃くなってきた。シヨウウィンドウに白いスプレーで絵を描いてくれと申し出があったけど、丁重にお断りした。面倒臭い。ついでだからリースを外して行けと言ったら、それは逆にお断りされてしまった。

「……と言っわけしてね」

俺は昨日の出来事を和室にいる白井さんに話し終えた。

「そりゃあ、大変だったねえ」

「ええ、まあ結局そのまま流れ解散になっちゃって」

「そうか、よっぽどの事がその会話の裏側にはあったんだろうね」

そう言って白井さんはお茶を啜る。

「元気になってくれると良いんですけどね」

「そうだねえ」

「まあ、なんせ昨日はすみませんでした。急にお休み貰っちゃって仕事、進まなかったでしょう」

「ああ、店、開けなかった。臨時休業」

そう来たか。なんて店長だ。

「いいんですか、困った人がいたかもしれないですよ」

「大丈夫だよ。常連さんはその辺分かってるし、ご新規さんもここ数ヶ月で、その赤城さんぐらいだろうしねえ」

返す言葉が無かった。そりゃあそうだろう。白井さんが好きでやっているだけの、いわば趣味の館みたいなものだ。定休日だってないのだから。

「さて、それじゃ、仕事に戻ろうかな」

お茶を飲み干して、湯飲みをちゃぶ台の上に置いた白井さんはそう言って一つ伸びをした。

「こっちは仕事じゃないんですか？」

いつか……

「あはは、そうだね。頼りにしているよ、藍沢君」
よろしく、と片手を挙げて白井さんは部屋を出て行った。何と言
うか、本当に自由だな。

白井さんが出て行くと、途端に静かになる。いくら客足が鈍いと
は言え、いつもなら日に何人かは店を覗きに来るのだが、この日に
限って言えば、全く客の現れる気配は無かった。暫くは陳列棚を整
理したり、平積みになっている本を崩れないように積みなおしたり、
埃を落としたりとしていたのだが、もともと大して本が動くことも
無くて、すぐにすることがなくなってしまった。

ぼうつとしているのも手持ち無沙汰で落ち着かないので、俺は新
しく持つてきた文庫本をカウンターの脇に置いた鞆の中から引ッ張
り出した。ストローブを足元に引き寄せ、準備は完了だ。俺は一ペー
ジ目を開いた。

文庫本を四分の一ほど読み終わった頃だろうか、ふと入り口のガ
ラスが揺れたような気がして、俺は顔を上げた。視線の先、入り口
の扉越しにこつちを見ていた赤城さんと目が合う。
硬直。

ぼんつと音が聞こえそうな勢いで顔を真っ赤にした赤城さんは慌
てて後ろを向いた。何をしているんだか。

その様子がちよつと可愛かったので、つい笑ってしまう。

恐らく栞を取りに来たのだろう。俺はカウンターを立ち、入り口
の扉を開けてやった。

「いらつしゃいませ」

「あ……、こ、こんにちは」

ぎこちなくこちらを向き、赤城さんは困ったように笑顔を浮かべ
た。紺色のコートに少し大きめの茶色いバッグ。定番のお出かけス
タイルなのだろうか。

「栞？」

「あ、はい」

いつか……

「ちゃんと置いてあるよ。とにかく中に入って。冷えるよ」
「あ、す、すみません」

いやいや、店に入るのにすみませんも無いだろうに。おずおずと赤城さんは店の中に入ってきた。

「ええと、はい、どうぞ」

俺はレジの横に挟んでおいた梨を引き抜いて赤城さんに手渡した。
「ああ、良かった」

それを受け取って、心の底からほっとした表情を浮かべた。それからぐるりと店内を見回して、ため息を一つついた。

「……沢山、ありますね」

「まあ、一応本屋を名乗ってるらね」

「あ……、そうですね。あの、ちょっと見て言っても良いですか？」

「もちろん。届かない本とかあれば声を掛けてね」

狭い店内だが、陳列棚の高さは結構ある。一番上の本になると、俺でも台が必要だ。頭一つ分は俺より低い赤城さんでは、まず届かない高さだ。

赤城さんが店内をぐるりと巡り始めたので、俺は読んでいた文庫本を再び開いた。

「くしゅん」

その途端に小さなくしゃみをする赤城さん。俺が顔を上げると、赤城さんは恥ずかしそうに鼻を押さえていた。その指先が随分と赤かった。ひよつとして、結構長い間外から様子を伺っていたのだろうか。

「お茶、飲んでいく？」

「え？」

「いや、寒そうだから。ちょっと暖まって行ったらどうかな？」

「でも、悪いですし」

俺はその言葉に構わず、立ち上がった。

「どうぞ。ストーブもあるから、暖かいよ」

いつか……

「いや、あの」

「お茶、入れるから、座ってて」

俺は和室に上がり、ちゃぶ台の湯飲みを二つ手に取った。

「あ、あの、し、失礼します」

暖かさの誘惑が勝ったのか、俺に気を使ってくれたのか、赤城さんはぺこりと一礼してから椅子に腰掛けた。爪先が自然とストープのほうに寄って行くところを見ると、やっぱり随分寒かったんだろ
う。

「はい、どうぞ」

「あ、ありがとうございます」

そう言っただけで受け取った湯飲みを手でしっかりと包み込む。その暖かさを少し味わってからずずと一口飲んで、ほろりと幸せそう
なため息をつく赤城さん。

「今度から、遠慮しないでいいからね」

「あつ……はい」

恥ずかしそうに俯いてしまった。俺は、和室の上がり口のところ
に座布団を引いて腰掛けた。静かな沈黙が少しだけあって、それか
らおずおずと赤城さんは口を開いた。

「昨日は、すみませんでした。恥ずかしいところをお見せしてしま
って」

「ああ、気にしてないよ」

「私ってば、取り乱しちゃって……。しかも送って頂くのまで断っ
ちやって」

「うん、誰だって気分の乗らないときはあるから」

気にならないわけじゃないけど、立ち入ってしまうのも無礼と言
うものだろう。

「ありがとうございます」

頭を下げる赤城さん。そんな大層な事を言っただけでもないのだ
けど。

「そっいえば、赤城さんは小説家になるのが夢なの？」

いつか……

「えっと……」

「ああ、ごめん。立ち入った事だった？」

「いえ、そういうわけでは……。夢……でした。でも、もう今は書いていないから」

「そういえば、昨日もそんなようなことを言っていた。」

「前はそうだったんだ？」

「はい、下手の横好きですけど」

「誰だって最初はそうだよ。そこから、好きこそ物の上手に持つていくんだから」

「そ、そうですね」

「そうか、小説家を目指していたのか、凄いなあ」

「凄いですか？」

良くわからない、そんな口ぶりだが表情は少し嬉しそうに見えた。きつと、本当にそこに向かって進んでいたんだろう。そんな風に思った。

「それじゃあ……」

なんで止めちゃったの、そう尋ねようとしたときだった。不意に入り口のドアが開いた。

「こんにちはー」

はきはきとした喋り方。明るいグレーのスーツ姿で店内に元気良く入ってきたのは、僕の良く知る顔だった。

「高倉さん、こんにちは」

短く切りそろえたボーイッシュな髪型に薄化粧。素の顔立ちがいせいか、それでも十分に綺麗だった。

「おおっ、青春真っ只中だったかな？」

いたずらっ子のように意地悪な笑みを浮かべつつ、高倉さんは赤城さんと僕を交互に見る。本人としては茶目っ気たっぷりつもりなのだろうが、如何せん相手が悪い。赤城さんは途端に真っ赤になつて俯いてしまう。

「あ、あのっ、私、帰りますっ。長々とお邪魔しました」

いつか……

ぴよんと立ち上がり、それから深々とお辞儀をして、赤城さんは飛ぶ様に店から走り出て行った。

「あらら。なんて可愛い」

いささか拍子抜けしたような顔で見送る高倉さん。相手を選ばずに茶目っ気をぶつけるのは高倉さんの良いところであり、悪いところだと思う。

「最近の子は、もっと進んでるかと思ったけど、ああいう子もいるのねえ」

「初対面なのに、いきなりからかうからです」

「だって、あんな場面を見ちゃったらねえ。からかいたくなるでしょう?」

知らんけど。

「挨拶するとか、とりあえず自己紹介しておくとか」

「会話はテンポなのよ」

ダメだこの人は。暖簾に腕押し、とはこういう気分なのだろうか。「クリスマスはあの子と過ごすのかしら?」

親父臭いからかい文句は綺麗に流すことにした。

「分けのわかんないことを言わないでください。で、御用は?」

「……つまらないわねえ。先生、いる?」

「奥で仕事してると思いますよ」

「そう、上がらせてもらうわね」

「はいはい」

「覇気の無い若者ねえ」

高倉さんはため息をつきながら、和室に上がって奥に入っていた。

高倉さんは作家月夜満、つまりは白井さんの担当さんだ。年は僕より大分上だろう。確か、結婚もしていたはずだ。それなのにバリバリ仕事もして、家庭のこともこまめにしているらしいから大したものだと思う。一人で暮らしていても、家庭が全く成り立っていない人もいると言うのに。誰とは言わないけど、俺の良く知っている人

いつか……

だ。

高倉さんが愚痴をはいているところなんて見た事がない。それどころか、うちに来るときにはいつも嬉しそうだった。

今日は多分、文芸雑誌で連載している作品の原稿でも取りに来たんだろう。普段、バイトである俺に店をまかせつきりで引っ込んでいるだけの事はあつて白井さんは優良作家らしい。おかげで楽で仕方が無いと、以前高倉さんが言っていた。

いつか.....

第六話

高倉さんの茶々のせいで、話が中途半端になってしまった。せっかく色々話をやるチャンスだったのに。よくよく考えてみれば、俺は赤城さんの携帯番号とか知らないのだ。この間売って貰ったときに書いていったのは自宅の番号だった。ここにかけるのはさすがに気が引ける。

分からないものは仕方ないので、俺は諦めて本の続きを読むことにした。そういえば、栞の桜のことも、赤木さんなら知っているはずだ。また、機会があれば、そのときに話を聞いてみよう。そう思っただけで本を開くと、またドアが開いた。

「やあ」

幾分、沈んだ声でそう言いながら明良が入ってきた。

「随分おとなしいな。珍しい」

「昨日はごめんよ。あんなことになるとは……」

「いいよ。気にしてないし。さっき赤城さんも来てたぞ。元気そうだったけどな」

「ああ、そう。それは良かった」

ほう、と小さくため息をつく明良。いつもの脳天気さが無いと、何となく今すぐにも死ぬんじゃないかと思ってしまう。

「茜ちゃんが落ち込んでるんだ……」

「赤城さんのこと？」

「うん」

昨日の様子からすると、色々事情を知っているみたいだったけど。何があつたんだろうな

「わからないよ。僕も碧ちゃんとは昨日が初対面なんだ」

それなのに早速碧ちゃん呼ばわり。明良のこういう垣根の無さは凄いと思う。

「そうなのか。それじゃ、茜ちゃんに聞いてみるしかないな」

いつか……

俺の言葉に、明良はまた一つため息をついた。

「僕も色々聞こうとしたんだけどね。話してくれないんだ。あんまりぺら言うようなことじゃないって」

「そうか。でも、何だか分からないまま関わってしまったってのも、あんまり気分が良くないな」

「やっぱり、そう思うかい？」

俺が頷くと、明良は少しほっとしたように笑顔を見せた。

「僕も昨日からそれが納得行かなくてね」

どうやら元気の無い原因は、茜ちゃんが心配だっただけではないらしい。明良なりに事態を收拾させる糸口などを模索していたのに、結局肝心な部分が抜けているから不満だったということも多分に含まれているようだった。

「うん、やっぱり説明してくれるように言ってみるよ」

「それがよかるう」

「悪いね、辛気臭い話ばかりしちゃって」

「いいよ、別に」

「ありがとう」

そう言っただけで明良は出て行った。少し、顔つきが明るくなっていたような気がした。まあ、あいつの気が晴れたのなら、何よりだろう。元気なときは煩いけど、ああして静かなのを見てしまうと、やはりいつも通りの明良の方がましだな、と思う。

「それじゃ、どうもお邪魔しましたー」

元気の良い挨拶を残して、高倉さんが帰って行った。かれこれ二時間ばかり、いつもに比べると随分ゆっくりしていったものだ。太陽も既に西に傾いている。

「新作の打ち合わせですか？」

高倉さんの姿が見えなくなってから、俺は白井さんに聞いてみた。

「あ、ああ、まあね」

珍しく歯切れの悪い答え方。白井さんは間延びしているようで、

いつか……

イエスとノーは意外とはつきりしている。と言うか、態度でわかるので不自然さが自然と際立つ。

「もしかして、原稿サボっていましたか？」

「ああ、いや、そういうのじゃないんだけどね」

けど、何なんだろうか。まあ、なんでも言い合つと決めた仲ではないので、内緒ごとの一つや二つはあっても全然構わないのだが。

それから何日か後のこと。俺は店番を白井さんをお願いして、店の近所のコンビニに来ていた。いつも持っているマスクを忘れてきてしまったのだ。洗濯して干しっぱなしにしていたのが失敗だった。取りに帰ると時間もかかるので、近所のコンビニで買うことにしたのだ。まあ、スベアがあった方が便利だし。

コンビニにもすっかりクリスマスが来ていた。店内にはちっちゃなツリー。窓ガラスにはトナカイの絵。もう少ししたらお菓子のブーツとか並ぶんだろうな。

久しぶりに外に出た。冬だから当然寒いのだが、今日は幸いにも快晴で散歩にはもってこいの日だった。白井さんには悪いと思いつつ、俺はのんびり歩いて、ついでにちょっと雑誌なども立ち読みして、気がつくと小一時間ほど過ぎていた。さすがにのんびりしすぎたな。そう思いつつ、店への帰り道を急いでいると、向かいから赤城さんが歩いてくるのが見えた。

「やあ」

「あ、こんにちは」

俺が挨拶をすると、赤城さんも立ち止まってぺこりと会釈をしてくれた。

「この間は高倉さんがごめんね。悪い人じゃないんだけど」

「あ、いえ。私のほうこそ逃げ出しちゃって。失礼なことをしてしまいました。昔から人と接するのが下手なんです」

少し寂しそうにそう言った赤城さん。俺はどっちかと言うと、高倉さんが無遠慮なのだと思う。

いつか……

「気にしないで。あの人はちょっと特殊なんだ」

「あ、はい」

少し曖昧な返事。

ふと見ると、赤城山は胸元に紙袋を一つ抱えている。うちの店の袋だった。

「あれ、お買い上げ？ありがとうございます」

俺がそういうと、赤城さんは慌ててパタパタと手を振った。

「い、いえ、違うんです」

「というと？」

「実は……、これこの間売った本なんです」

そう言っつて、赤城さんは中身を見せてくれた。それは、一つだけ新しかった、あの園芸の本だった。

「これ、売るはずじゃなかったもので、その、お父さんが間違えて入れてたみたいで。私も、気付かなくて」

「大切な本？」

「はい。そうなんです」

なんとも申し訳無さそうな赤城さん。恐らく、本は白井さんが気軽に渡したのだろう。いいよ、いいよ、もって行ってとか何とか言っつて。

「お金、返しますって言ったんですけど、計算が面倒だからいいっつて」

やはりそうか。まあ、店長が言うならバイトの俺がどうこう言えるものじゃないけど。

「まあ、店長がいつって言うならいいんじゃない？」

俺としてはこう言うしかない訳で。赤城さんも複雑な顔をしつつ、

「はあ」と呟くように言った。

「そういえばさ、その本に挿んであった栞」

「はい？」

「桜の栞さ、あれなんていう栞？」

「あ、あれは御衣黄と言います。御意の御に衣、それから黄色の黄

いつか……

で御衣黄です」

随分と物々しい名前だ。

「珍しい桜なの？」

「そ、そうですね、この辺じゃ見かけないかもしれないです」

「へえ、何でその栞を赤城さんが？」

「え……、あ、その貰い物です」

何となく、そう言った赤城さんの表情に影が出来たような気がした。

「そうなんだ。うちの店長が良い栞だつて言ってたよ」

「そうですか。ありがとうございます」

俺が言つと、途端に影は消えて、赤城さんは嬉しいような、照れくさいような顔をしてみせた。ふと、この間聞きそびれたことを思い出し、俺が口を開こうとした瞬間、携帯電話が音を立てた。

「あ、ちよつとゴメンね」

赤城さんにそう断つて携帯電話を引つ張り出すと店からだった。

「もしもし」

「あ、藍沢くん。まだ帰らない？」

白井さんの声は明らかに困っていた。どうしたんだろう、突然店が繁盛して手が足りなくなつたかな？

「え、あ、もう帰りますよ」

「悪いんだけど、ちよつと急いで帰ってきて〜」

「はい」

電話は切れた。ちよつと慌てているような感じだったな。話はしたいけど仕方が無い。

「ごめん、店に戻らなきゃ」

「あ、お引止めしましたか？ごめんなさい」

「いや、声を掛けたのはこっちだし。栞の話が聞けてよかった。店長に宿題を出されてたんだ。その栞は何の花でしょうって」

「あ、カンニングですね？」

ふざけて咎めるような口ぶりになる赤城さん。

いつか……

いつか……

「いやいや、聞き取り調査……っでことで」

「はい、分かりました」

「それじゃあ、また、店に来て」

「はい、是非」

別れ際に見せてくれた笑顔をお土産に、俺は店への帰り道を急いだ。

第七話

店に戻ると、店内はちよつと悲惨なことになっていた。

「あ、藍沢君。待つてたよおー」

困り果てた声の白井さん。レジ横に積んであつた本の塔が消え去り、変わりに店内は本の絨毯が出来上がっていた。

「さつき、この間本を売りに来た子、ええと赤城さんだっけ？が来てねえ、本を一冊返してくれって言つから返してあげたんだ。どれなのか分からなくて、何冊か取り出して見せたんだよ。そこまでは良かったんだけど、積み直すときに失敗しちゃつてねえ」

「こりやまた、大した数ですね」

「いやあ、まさかこんなに積み上がつてるとはねえ」

頭をぽりぽりと掻きながら、白井さんは眉をひそめて苦笑いを浮かべた。そろそろ片付けた方がいいですよ、とはいつも言っていたのだが、まさかこれほどの威力を秘めていたとは。

「まあ、とにかく片してしましましょうよ」

「悪いねえ、一人じゃどうにも手がつかなくてね」

「いえいえ、仕事です」

俺は袋の中から早速新しいマスクを取り出して装着した。

「さつき、外で赤城さんに会いましたよ。本を返貰つたつて、嬉しそうでしたよ」

俺は本をかき集めながら、さつき外であつたことを伝えた。

「そうかい。何でもお兄さんの本らしいねえ」

「ああ、そうなんですか。大切な本とは言っていましたけど」

「売るつもりの無い本だつたらしいねえ」

「ええ、それは聞きました」

彼女にお兄さんがいたのは初耳だ。お兄さんの本を勝手に売つちやつたのなら、そりゃあ怒られたことだろう。

「引越したばかりで、家をごちゃごちゃしているんですかね」

いつか……

いつか……

「あ、引越ししてきたんだ」

「この間の食事会で、そんなこと言っていましたよ」

「どっから引つ越してきたの？」

「そういえば、それは聞いていない。聞く暇も無かったともいえるけど。」

「ああ、それは聞いている暇が無かったですね」

「そうか、確か騒がしかったんだっただね」

白井さんはそう言いながら、手際よく本を積み上げていく。

「そういえば、栞の桜、分かりましたよ」

「ああ、あれね」

「御衣黄ですよね」

「そうそう。ちゃんと調べたんだね」

「えっと、あの……。さつき、赤城さんに……」

嬉しそうに言う白井さんに嘘がつけず、俺は本当のことをつい口にした。

「なんだあ、カンニングかい？」

少し呆れたように白井さんは笑いながらそう言った。

「どうしても分からなくて。聞き取り調査を……」

「そうかい？で、どんな花なのか聞いた？」

「え？まあ、この辺じゃ見当たらないってことだけは」

「やれやれ、学生なのに探究心が足りないねえ。ダメだよ。何につけても探究心や好奇心でのん大事だからねえ。そういうのが自分の夢を叶える足がかりになったりするんだから」

「そう言っつて、白井さんは片付けの手を止めて本棚のほうに歩いていった。」

「ええと、この辺にあつただけだな。ああ、あつた」

「そう言っつて、白井さんが本棚から引つ張り出してきたのは、古臭い植物図鑑だった。」

「この桜のところを見てごらん」
言われるままに、そのページを開く。その中には何種類もの桜の

絵が載っていた。写真じゃないところが、いかにも古臭い。その中に御衣黄桜があった。

「ええと、開花は四月の下旬から……。サトザクラ種で、ええと花が……緑色!？」

これは驚きだった。緑色の花が咲く桜なんて、ついぞ見たことが無い。初耳もいいところだった。確かに、図鑑のイラストにも緑色の花が描かれている。

「これは……珍しいですね」

「面白い花だろう?」

僕は正直に頷いた。これは確かに一見の価値ありだ。

「緑なのは最初だけで、徐々にピンクになっていくんだけどねえ。」

そこがまた面白いだろう」

「白井さんも詳しいんですね」

「まあ、僕も実物はこの間の押し花でまだ二度目なだけけどね」

「前はどこで見たんですか?」

「あれは島根に行ったときかなあ。取材だね。綺麗な緑色がずらっと並んでいてねえ。あれは綺麗だったなあ」

そのときの風景を思い出すかのように、遠い目をしてしみじみと呟く白井さん。

「島根かあ。結構遠いですね。あの栞は旅行にでも行ったときに作ったのかな?」

「いや、結構いろんなところで見られるんだよ。この近所でも探せばあるかもね」

「ありがとうございます。勉強になりました」

「いやいやあ。でも、色々と興味を持つってのは良い事だと思うよ。まあ、時と場合にもよるけどねえ」

そう言って、少し遠い目をする白井さん。何か、あったのだろうか。そんな俺の視線に気がついたのか、白井さんはちょっとてれたように笑った。

「さあ、片付けちゃおうか」

いつか……

「ああ、はい」

俺は図鑑をカウンターの上面において、再び本を拾い集め始めた。

本を拾い終わると、白井さんは「それじゃ、後はよろしく」と言
って再び奥の部屋に引っ込んでしまった。俺はカウンターに置き去
りにされた図鑑を戻すために本棚に近づいた。もとの位置に差し込
みながら、ふと他にどんな本があるのか気になった。この店でバイ
トを始めて二年になるけど、こうしてつぶさに本棚を眺めたことな
ど無かったような気がする。店員として、あるいは一人の本好きと
して、俺は不意に宝探しを始めたくなった。

いつも本屋でやっているように、端からずつと見ていく。殆どが
ハードカバーで、背表紙も色あせているような本が多い。小説、エ
ッセイ、研究書、辞典、図鑑。大型書店にも引けをとらないような
種類の多さ。ただ、ある程度のすみわけがされているだけで、本棚
はやはり雑然としている。

白井さんは図鑑を見つけるときに、確かこの辺にと言いながら、
一直線に本棚に向かった。普段は俺にまかせつきりに感じていたが、
やはりここは白井さんの本屋なのだと感じる。そして、それを少し
だけ悔しく思う自分がいることに気がついた。

俺は、俺が思う以上にこの本屋のことが好きなのかもしれない。

ふと、何となくそう思った。

第八話

翌朝、携帯電話のけたたましい着信音に俺は起こされた。眠い目を擦りつつ、時計を見るとまだ六時半だ。人間の起きる時間じゃない。そんなことも無いか。くだらないノリツッコミを心の中でしつつ、電話に出る。

「もしもし」

「あー、藍沢君。ごめんねえ。寝てた？」

電話の向こうから聞こえてきたのは白井さんの声だった。

「ああ……、白井さん……大丈夫ですよ」

「はは、そんなことも無さそうだね」

「……ふあい」

いかん、欠伸混じりになってしまった。

「あのね、今日ちょっと用事があるんだ。お店、休みにするから、君もゆっくり休んで」

「あ……はい。分かりました」

「それじゃあ、おやすみい」

電話が切れる。俺は頭の中でせつせと白井さんの言ったことを整理しにかかった。寝ぼけているせいか、時間がかかる。

ええと、今日は休みと言うことは、つまり丸一日暇になったわけか。なるほど、それはそれでいいかもしれない。たまにはお出かけでもしてみようか。このところ、一人でどこかへ出かけたという記憶が無い。

そんなわけで、俺はとつと寝床から出た。六時半ともなるとさすがに日は昇りきっている。いい天気だったけど、試しに窓を開けて見るとやっぱり寒かった。おかげで目も覚めた。慌てて窓を閉める。我ながら頭の悪いことをやってしまった。

いつか……

風呂でさっぱりしてからトーストとオムレツで簡単に朝飯を済ま

せ、その片づけを終える頃にはそれなりに良い時間になっていた。さて、問題はどこに出かけるか。あまり疲れず、それなりに成果の感じられるところが良い。わかりやすい成果というと、シヨツピングだろうか。ふと本棚を見やる。

そろそろ手持ちの本のストックが心許なくなってきたので、新刊を探しに繁華街の大きな書店に行くことにした。この季節の繁華街は人が多くて好きではないのだが、近所の本屋ではどうしても絶対的な数と言う点で大きな書店に及ばない。ブラブラと書店の中を眺めているだけでも十分に楽しいので、時間潰しにももってこいだし。

本屋に辿り着き、俺はようやく一息ついた。なんて人の数だろうか。見渡す限り、人の頭だらけだ。電車でたったの二駅なのに、こゝも変わるものだろうか。まあ、この繁華街はアーケードになっていて、店も密集しているから何時でも人通りは多い。それでも今日は異常だと思う。冬休みだからだろうか。

しかし、本屋の中はいつもと変わりなかった。大きいのに静かで、皆黙々と本棚を眺めている。たまに二人連れがあっても、この雰囲気飲まれてか小声で喋ってくれている。

エスカレーターで三階に上がり、文庫本の棚を目指す。その途中で新刊が平積みになっている台があったので覗いて見た。

「肉ジャガ」

タイトルにそう書かれたやさしい色合いのカバーの本が目に残まる。作者は月夜満。言うまでもなく白井さんの新刊だ。これに関しては買うまでも無く作者、つまり白井さんがくれる。この本も貰って既に読み終わった。

白井さんの本は表現が豊かで、読んでいる人の感情をそれとなく引き込んでくれる。全体的にまったりとした空気の中で話が進み、ラストではほろりと来ることもあれば、じーんと染み入る感動をくれたりもする。最近の殺風景な世の中に比べれば百万倍暖かい世界が白井さんの書く作品の中にはあった。

いつか……

それ以外もざっと見回してみたけれど、新刊で目を引くものは特に無かった。

後は近くの棚からローラー作戦で出会いを探すのみ。珍しいタイトルの本を引っ張り出してパラパラと読んでみたり、好きな作家さんの作品で買い漏らしが無いかチェックしたり、なかなか胸の躍る作業だ。

結局俺は三冊ほど抱えてレジに行った。本当はもっと買いたいのだけど、生活費との秤にかけたとき、月に買う本の冊数はおのずと限定されてくる。レジで何枚かの千円札を出し、おつりと本を受け取って俺は店の出口に向かった。

「あ、裕也さん」

出口の手前で突然声を掛けられた。振り返ってみると、そこには水色のダウンジャケットを着た茜ちゃんがいた。いつもセットの明良の姿は見当たらない。

「やあ。明良は？」

「今日はいませんよあ。私だって、たまには一人で出かけますよあ。それもそうか。」

「今日は買い物？」

「ええ、お菓子のレシピなどを」

そういえば、何時か明良が言っていたのを思い出した。茜ちゃんはいたいそう菓子作りが上手いらしい。

「最近、ちよっと明良の愛を感じるものがあつたのでえ、新作ケーキなどでお返ししてやるっかなーって」

はいはい、ご馳走様。俺はなんとも言えずとりあえず苦笑い混じりで「そう」と言っておいた。

「あ、そうだ、この後、ちよっとだけ時間ありますかあ？」

「え、ああ、別に構わないけど」

「この間のこと、私詳しい事情を言っただけ……。そのせいで明良と裕也さん、分けわかんなかったですよねえ」

「ああ、まあね」

いつか……

「どうやら、明良はあの後であかねちゃんと話しをしに行ったらしい。」

「明良つてば、何だか分からないまま関わってたのって気分良くないよって、怒ってくれたんです。力になれないじゃないかって」

「そのままの台詞を俺も口にした覚えがある。オリジナリティーゼロで全部俺の受け売りか、明良よ。まあ、いいけど。」

「それで、裕也さんには明良が説明するって言ってたんですけど、何か聞きましたか？」

「いや、聞いてないなあ」

「恐らく完全に忘れているだろうな、あいつのことだから、茜ちゃんの前で格好良い事を言えたことに満足してそれっきりというパターンだろう。」

「ん、もう。かつこいいこと言ったくせに」

「まあ、いいさ」

「せっかくここで会えたので、私の口から説明しますね」

「それが良かろう。とは言え、本屋の出入り口のそばで延々話をするといいものなんなので、近くの喫茶店に場所を移すことにした。」

第九話

「あの、碧はこの件のことあんまり知られるの好きじゃないみたいです。だから、その、明良にも言っただんですけど……、碧には黙っててください」

そう言っって茜ちゃんは話を切り出した。

「一年前のなんですけどお、当時、碧は隣町に住んでて、なんか曾お爺さんの時から住んでたとかで、大きな庭があるんです。私も何回か行きましたけど、すつごくいいところでした」

「うん」

そうか、以前は隣町に住んでいたのか。

「で、お兄さんが一人いて、凄く仲良しだったんです。歳が少し離れてて、可愛がって貰ったことしかないらしくてえ」

この間売りに来た園芸本の持ち主だな。なるほど、わざわざ茜ちゃんが取りに来たのも、仲良しのお兄さんの本だったからか。

「それでえ……、そのお兄さん事故で死んじゃったんです」

茜ちゃんは一旦ここで言葉を切った。俺の反応を伺うようにこちらを見たが、あまりに唐突な展開過ぎて、俺には何もいうことが出来なかった。

「家族の人も随分悲しんだらしくて、いろいろと揉めたらしいんですけど、結局引越したんです。でも、一番シヨックが大きかったのが碧だったみたいでえ、ええと、ふさぎ込んだじゃったと言っつか。もう二度と笑わないんじゃないかって言うぐらい落ち込んでえ。三ヶ月ほど前、やっと大学にも出てくるようになったんですけど……」

そこで茜ちゃんは大きなため息を一つついた。茜ちゃんの目から見れば、まだ全然回復してないってことなのだろう。

「それで、小説も書いていたんですけどやめちゃったみたいでえ。でも、碧の小説、素敵だったんですよ。小説家になりたいって言っ

いつか……

てたし、だからもう一回小説を書いて欲しいなあって」

それで、あんなに小説を読んでもらうことを勧めていたのか。

「多分、小説を書く気力がわいてこないんだと思うんです。こないだの食事のときに、明良が裕也さんを連れてきてくれてじゃないですか。だから、裕也さんみたいな本を読む人に読んで貰って、いろいろと刺激になることを言っ貰えれば、ひよっとしてもう一回書いてくれるかなあって思っただんです」

「俺以外が行ってたらどうしてたの？」

「うーんと、とりあえず碧に元気になって貰ってえ、その後、明良に本を読む人知らないって聞くんもりでした」

そう言われると、なんとなく最終的に俺のところに戻ってきていた気がしないでもないけど。

「でも、結局あんなになっちゃってえ……。ちょっとやりすぎたかなあって」

「あの後、話はしたの？」

「はい、その日の晩に。碧は気にしてないよ、こっちこそゴメンねって言っただんですけどお……」

多分それは本当なんだろう。次の日に会った彼女は、少なくとも前日を引きずっているようには見えなかった。ただ、茜ちゃんの心に残るめたいところがあるってことか。まあ分からないでもない。

「会った？」

「いえ、何となく会いづらくて」

「でも、次の日栞取りに来てたし、それから一回あったけど、元気そうだったけどな」

「本当ですか！？それなら、少しほっとしましたあ」

ほっと息をつき、にっこりと笑う茜ちゃん。

「もう一回、会って話してみたら？」

「はい、そうしてみます」

そう言っ、茜ちゃんは元気良く頷いた。

それから少しだけ明良との惚気話を聞かされて、程よくウンザリ

いつか……

した頃に俺達は店を出て分かれた。

家に帰ってから、買った本を読もうとしたけど、なんだか予想外に疲れてしまったようでそのまま寝てしまったのが、なんだか悔しい。

翌日、白井さんは朝からなんだか元気が無かった。

「どうしたんですか？」

俺が聞いても白井さんは「うん、まあねえ」と要領を得ない。いつもならとつと仕事場に引っ込んでしまুকせに、今日に限って和室で湯飲みを抱えてぼんやりしている。昨日の用事とやらで何かやらかしたんだろう。

「連載でも打ち切られたんですか？」

「はは、それならもつと気楽だけどねえ」

それはそれで作家として問題ありだろう。

「じゃあ、女性関係？」

返事の変わりにびくつと体を震わせた白井さんは、その弾みで湯飲みを取り落とした。中に入っていたお茶が畳の上にこぼれて水溜りを作った。

「わっ、何やってるんですか」

俺は慌てて和室に駆け上がり、付近を取るべくキッチンに駆け込んだ。ティッシュで先に拭いていた白井さんからそのティッシュを受け取り、流しの三角コーナーに放り込む。代わりに渡した布巾で畳を拭きながら、白井さんは一つため息をついた。

「やれやれ、参ったなあ」

「どうしたんですか？」

「いやあ、何でもないよ」

そう言いながら、拭き終わった布巾を持ってキッチンにやってくる白井さん。

「でも、朝から変ですよ」

「変、かな？」

いつか……

いつか.....

「とても」

「うーん、そうかあ。でもね、これはあんまりぺらぺら喋ることでもないしねえ」

穏やかだけど、有無を言わせぬ調子と言うのだろうか。一枚の強固な壁を感じた俺は、それ以上聞くのをやめた。どうせ聞いても教えてくれないからだ。いつか教えてくれるかもしれないし、教えてくれないかもしれないが、とにかく今は何を聞いても無駄だろう。

「何かあつたら呼んでよ」

大きなため息混じりにそう言って、白井さんは奥へと歩いていった。

女性関係ねえ。こういうところが分かり易いのは白井さんの重大な欠点だろう。彼女でも出来たのかな。それとも久しぶりのデートで下手打ったとか。色々と考えてみると、結構どれもありそうだ。

第十話

「いよう、元気かい、親友」

俺が色々和白井さんの失敗について妄想を巡らせていたら、そんな脳天気な声が冷たい空気と共に店に飛び込んできた。立っていたのは、ブルーのダウンジャケットを着た明良だ。

妄想を吹き散らされたのが、大変気に食わないので、俺は明良をぞんざいに扱うことにした。

「何か用か、浮かれ虫」

「虫は酷いなあ」

そう言いつつも、明良の声は弾んでいた。この前とは大違いだ。

「いやあ、茜ちゃんと話したんだって？」

「ああ、話したよ」

「ちゃんと理由を教えてくれたる？」

さりげなく親指で自分を指差しながら、明良は「どうだ」という顔をしてみせる。

「俺の台詞を丸パクリしたらしいな」

「うん、何のこと？」

「帰れ」

俺は拒絶の姿勢を示すべく、鞆の中から文庫本を取り出して開いた。

「ああ、もう、悪かったよ。だって自分じゃ思いつかなかったんだもの。感謝してるからさ」

文庫本の向こう側でぺこぺここと頭を下げる明良。その態度に免じて、俺は文庫本を閉じた。

「昨日茜ちゃんがケーキを焼いてくれてね。そのときに話を聞いたんだ」

「ああ、そういえばそんな本を買っていたな」

「それがすっごく美味しくてね。俺が美味しいって言ったら、茜ち

いつか……

やんが喜んでくれるんだけど、その笑顔がまた可愛くて……って、本を読み直さないで聞いてよ」

俺は開きなおした文庫本から、精一杯嫌な顔を作って明良に視線を送った。

「その馬鹿馬鹿しい惚気話を聞かせに来たのなら、速やかに回れ右して帰れ」

似たような話は、昨日喫茶店でも聞かされたし。

「違うよ。それで、茜ちゃんが差し入れて持って行ってさ」

そう言って、明良はカウンターのの上に持っていた白い箱を置いた。

「おお、悪いな」

開けて見ると、中には白いケーキが二切れ入っていた。

「茜ちゃんの新作だ。ハイパーふわふわチーズケーキだってさ」

「んー、良くわからんが美味そうじゃないか」

「美味そうじゃなくて、美味しいの。食べたら吃驚するよ」

「そりゃ楽しみだ」

とは言え、勤務中に食べるのはさすがに気が引ける。俺はそれを冷蔵庫にしまつて、後で食べることにした。

「茶でも飲んでいくか？」

「いや、いいよ。この後、ちょっと行くところがあるんだ」

「そうか」

いつもは何かしら理由をつけて長居しようとするくせに、今日に限って珍しい。

「あ、碧ちゃんの事、元気そうだったって茜ちゃんに教えてくれたんだってね」

「ああ、店にも来たしな」

「ありがとう。茜ちゃん、本当にほっとした顔をしていたよ」

「そうか良かったな」

「うん。それじゃね」

「おう、今日は何だ？今からデートか？」

「いや、プレゼント買いに行くんだ。そろそろクリスマスが近いし

いつか……

ね
そういうことか。明良は片手を挙げて軽い足取りで店を出て行った。

ケーキが二切れ入っていたので、白井さんと夕食後に一つずつ食べることにした。

「うん、美味しいねえ」

白井さんが舌鼓を打つ。俺も食べてみて驚いた。美味しいとは聞いていたが、そこらの店で買うよりもずっと美味しい。百聞は一見にしかずとはよく言ったものだ。

チーズケーキと言うよりは、チーズスフレに近いような感じだったけど、それよりも更に口当たりが軽くて、そのくせにチーズの味はしっかりしている。作り方なんて見当もつかないけど、間違いなく美味しかった。

夕食の間も元気の無かった白井さんだけど、このケーキのおかげで少し元気そうな顔が見れた。茜ちゃんに感謝だな。

「藍沢君さあ……」

ケーキを切り分けながら、白井さんが口を開いた。何と無く真面目そうな雰囲気俺は手を止めた。

「なんでしようか」

「例えばだけどね。例えば、月夜満という作家が新しいジャンルを書くとしたら、どういうのが似合うと思う？」

「は？」

突拍子もない言葉が飛び出してきた。この人は突然何を言い出すんだか。

「何でまた？」

「そうだなあ……。自分の作風に自信が持てなくなったとか。他のジャンルに挑戦することで、自分の新しい世界を開きたいとか、まあいろいろいる」

「うーん、パツとは思いつかないな。月夜満の作品といえば、ゆっ

いつか……

たりとした世界と豊かな描写の暖か味のある作品というイメージしかないですね」

俺の答えに、白井さんはちょっとがっかりしたようにため息をついた。

「他の読者もそうなのかなあ」

ケーキを口に運びながらそんなことを呟く白井さんは、何だか随分と弱気になっているようだった。

「さあ、どうなんですかね」

俺は一応含みを持たせてみた。けど、多分そうだと思う。確かに何冊か単行本を出しているけど、作品に漂う空気のようなものは大体同じだ。推理小説でトリックや犯人が変わっても、推理小説に代わりがないように、展開や背景が変わっても月夜満の世界は守り続けている。俺はそれが好きだから何の不満もなかった。

「こう、テンポアップしたコメディとかさ、仰天のファンタジーとかさ」

「……そりゃ、挑戦してみるのはいいことだと思いますけど……」

「……けど？」

「書けます？」

「そりゃあ、……どうだろうねえ」

大きくため息をついて、白井さんはケーキの最後の一口を放り込んだ。

「本当に、どうかしたんですか？」

「うーん、まあ、ちょっとスランプかなあ」

そう言っつて、白井さんは力なく笑っただけだった。

これは随分と重症だ。

第十一話

白井さんの家を出たのは九時過ぎ。商店街も飲み屋を除いては軒並みシャッターがしまっているし、人通りもあんまりない。昼間に比べて冷え込みも激しくなってきたみたいで、息が白い雲のように空中を漂うのが見えた。

そんな帰り道。クソ寒い商店街の居酒屋の前で見知った人がうずくまっていた。

「高倉さん？」

「ふえっ？」

奇妙な声を上げながら、高倉さんが顔を上げた。

「あらあ、勤労少年じゃなあい」

そう言つてケタケタと笑う高倉さん。顔が真っ赤でアルコール臭い。

「随分ご機嫌ですね」

「ご機嫌なもんですか。ばあか」

いつものはきはきとした口調はなりを潜め、代わりに酔っ払い特有の絡みつくような口調で高倉さんは俺に怒鳴った。テンションも少し妙な方向に行っているみたいだ。

「とりあえず、そんな所でうずくまっていたら、店に迷惑ですよ」

「ふーんだ。良いのよこんな店。私のこと酔っ払い扱いしやがってさあ。ムカツクう」

店を見上げるようにしてあっかんべーとして見せる高倉さん。

この姿を見る限りでも、お店の人たちの判断は限りなく全うで、ついでに言えば正鵠を射ている。完全にこの人は酔っ払いだ。

「とにかく、どこか移動した方がいいですよ。風邪引くし」

「いいのよお、もう私なんて良いのぉ」

「良くないですってば」

駄々をこね始めた高倉さんの腕を持って、俺は無理矢理立ち上が

いつか……

らせた。全く、この人は本当に俺より年上で、バリバリの腕利き編集さんなんだろうか。おまけに既婚者だと言っただから、全く面白い。いや、面白くはない。

「さあ、動きますよ」

「はい」

むくれたようにそう言いながら、一步踏み出した途端によるける高倉さん。俺は慌てて彼女を支えた。

「しつかりしてくださいよ」

「無理」

無理じゃなくて。心の中で突っ込みを入れてみるものの、相手は酔っ払いなので口には出さないで置く。どうせ通じないだろうし。

とにかく動かないと話しにならないので、俺は高倉さんの腕を自分の首の後ろ側に回して、肩を貸すような姿勢を作った。肩にのしかかってくる高倉さんの体重は意外と軽かった。何となく、女の人なんだなと思ってしまう。

「どこいくのお」

「そりゃ、とりあえずは駅ですよ。あそこなら電車もタクシーもあるし」

「うーん、帰りたくなぁい」

何を言っているんだか。俺は酔っ払いの戯言を適当に流して、そのまま駅のほうへと足を進めた。

「全く、ご家族の方が心配しますよ」

「してないよぉ」

「旦那さんとか」

「してないの」

「子供さんとか」

「いないもぉん」

一言返事をするたびにケタケタと笑う高倉さん。それにしても、お子さんいなかったのか。悪いことを言ってしまったな。そんなことを考えていたら、ケタケタと笑っていた高倉さんが急に静かにな

いつか……

った。

「……つもこいつも」

「はい？」

「どいつもこいつも……子供、子供ってさあ。そんなに生まない女はダメ？」

「は？」

「子供生まないとお、ダメですかあ！？」

ダメだ、目が完全に座っている。子供は地雷だったらしい。

「勤労少年！！あんた、この後有事あるの？」

「え、いや、特にないですけど」

「じゃあさ、ちょっと付き合いなさいよお」

「いや、でも明日も朝から仕事あるし」

「そういう台詞はサラリーマンになってから吐きなさい。別に飲みなおすって言うてるんじゃないのよ。私の話を聞けつての」

いいえを言う余地は無さそうだった。なぜなら、このとき俺の首にはしつかりと高倉さんの腕が巻きついていたので。やれやれ、姿勢を間違えたな。

「大体、少年のとこのあのとんちき作家が……」

そこまで言ったとき、高倉さんの言葉を遮るように、高倉さんの持っているバッグの中から電子音が響いてきた。

「何よ？」

ぶつぶつ言いながら、高倉さんは鞆の中から携帯電話を引っ張り出した。折りたたみ式の赤い奴で、裏側にはプリクラが一枚張られていた。良く見えないけど、男性と撮った写真みたいだった。旦那様だろうか。

「何よお、今日は帰らないって……。急にそんな殊勝な態度をとったって……うん、分かった」

テンションが急落するのに五分とかからなかった。恐らく相手は旦那さんだろう。

「勤労少年。駅まで送って。んで、私をタクシーに放り込んで」

いつか……

それぐらいならお安い御用だ。俺は快く承諾した。

「今日は自分で店番するよ」

白井さんがそんなことを言い出したのは、その日の昼過ぎのことだった。本棚の物色をしながら、のんびりと店番をしていた俺は、突然の申し出に面食らった。

この間は突然作風を変えたいとか言い出すし、今日は店番するとか言い出すし、スランプとやらの程度はなかなか酷いようである。何をしてもしてもどこことなく上の空だし、奥に引っ込んでいても、仕事なんて手についていないのだろう。

だからといって、駄目です仕事してくださいと言える雰囲気でもなかったの、俺はその言葉に甘えることにした。

「夕飯はどうしますか？」

「はは、どうしようねえ」

弱々しい笑顔。これは本当に重症だな。このまま放って置くと、中年の餓死死体が出来上がりそうだ。俺はすっかりそれを想像してしまい、ひどく切ない気分になってしまった。

「分かりました、店を閉めるころにまた来ます」

「うん、ごめんねえ」

そう言いつつも、白井さんの表情には生命力の影が見当たらなかった。

何があつたかは分からないが、今日はそつとしておいた方がよさそうだ。俺は小さくため息をつきながら、エプロンを外して和室の隅っこにかけているハンガーにかけた。それからその下に置いていた自分の荷物を持って、改めて店の入り口から外に出た。

第十二話

外は少し曇り空で、随分と寒かった。

クリスマスプレゼントにお勧めのものや、クリスマスセール看板、リースにスプレートのサンタクロース、店頭に飾られたツリー。商店街の軒先には、そんなものがずらりと並んでいた。クリスマスまであと二週間。デパートや繁華街に負けてなるものかと、こちらも必死のようだ。まあ、どう見ても商品のラインナップとかの時点で負けているんだけど。電車であつた二駅しか繁華街との距離は無い。休みともなれば、みんなそつちへ流れてしまつのは仕方の無いことなのかもしれない。

それでもこの商店街はまだ人が来ているほうだろう。世の中にはシャッター街になつてしまった商店街だつてあるのだから。

「裕也さん」

背中から大声が飛んできた。振り返ると、派手な黄色のジャケットに身を包んだ茜ちゃんが手を振っている。その隣には、深い緑色のコート姿の赤城さんが恥ずかしそうに立っていた。どうやら、無事にわだかまりも解けたらしい。

「どうも、こんにちは」

近寄つてきて、ぺこりと頭を下げる茜ちゃん。赤城さんも隣で頭を下げている。

「二人でお出かけ？」

「ええ、裕也さんに会いに来たんですよ。丁度出て来る背中が見えたんで、追いかけてきましたあ」

茜ちゃんはそう言つて、ほつと息を一つついた。言われてみれば、二人のほつぺたは少し赤くなつているし、息も若干速いかな。

「それは良いタイミングだった」

「本当ですねえ」

「それで、俺に何の用？」

いつか.....

俺が尋ねると、茜ちゃんは隣に立つ赤城さんを肘でつんと突いた。赤城さんは、しばらくもじもじとしていたものの、やがて決心を決めたように一つ深呼吸した。それから、もっていたバッグの中からA4サイズの封筒を取り出した。

「これ、私が前に書いた小説です。良かったら、読んでみてください」

そう言っただけのほうに差し出される封筒。受け取って中を覗いてみると、なるほど結構分厚い紙の束が入っていた。なかなかの大作っぽい。

「ちゃんと、感想も言っただけでくださいね」

「いいの？無理しなくても良いよ？」

この間、茜ちゃんから聞いた話を思い出してそう言っただけで、赤城さんは小さく首を振った。

「大丈夫です」

「この子、飲み会の次の日も本当は小説を持って行ってたんですけど」

そうだったのか。俺は菜を取りに来ただけかと思って、そんなことには気付かなかった。

「でも、店に入ったら急に恥ずかしくなっちゃったんですって。それに、急に知らない人が入ってきたからって」

茜ちゃんが困った娘なんです、とでも言いたげな口調でそう言っただけで、赤城さんは顔を真っ赤にして俯いてしまう。

「ああ、あの日は高倉さんが突然入ってきたからなあ」

「はい、私吃驚しちゃって。逃げたみたいで済みませんでした」
改めて頭を下げる赤城さんに、俺は慌てて手を振った。

「いいの、いいの。気にしないで。あれはあの人の無神経が悪いんだから」

「はい……あの、ありがとうございます」

「それじゃあ、これ確かに預かるよ。えーっと、読み終わったら連絡したら良いのかな？」

いつか……

「あ、はい。一番最後のページに、私の携帯電話の番号を……」
消え入りそうな声で赤城さんはそう言った。

「そう。じゃあ、俺の番号も教えておくよ。かけた時に分からなかったら困るから」

「あつ、そうですね、はい」

赤城さんは携帯電話をいそいそと取り出した。

「やったね」

と茜ちゃんが隣でからかう。ディスプレイに自分の番号を表示して赤城さんに見せると、赤城さんはせつせとそれを入力し始めた。

「あのお、そんなことしなくても、裕也さんが碧にワンコールすれば良いんじゃない……」

茜ちゃんは原始人でも見るかのような目つきで俺達のやり取りを見ながらそう言った。

「ああ、そうか。しまったな」

「あ、大丈夫です。もう、入れ終わりましたから」

なにやら基本的なことを指摘されて、俺も赤城さんも思わず赤面してしまう。何と無く笑いながら、携帯電話をポケットに押し込むと、赤城さんも笑いながら携帯電話を鞆にしまいこんだ。

白井さんとの夕食を終え、帰宅したのは十時過ぎだった。俺は風呂に入って体をさっぱりさせてから、コーヒーを入れた。それを片手にコタツに潜り込み、例の封筒を鞆の中から引っ張り出した。

取り出して、改めて見てみるとA4の用紙でざつと三十枚前後。

パソコンで打ち出された文字が整然と縦書きで並んでいる。表紙のタイトルは『桜の季節』。

俺は表紙をめくって一枚目を読み始めた。

兄と妹の話だった。無口で、でも優しく、本をこよなく愛する兄。そんな兄を慕う妹。冒頭から暫く、兄と妹の仲の良さが暖か味のある描写でゆったりと描かれている。中盤辺りから妹に思いを寄せる男が現れ、同時に兄の恋人が妹の前に現れる。ある日、兄は庭

いつか……

に一本の桜の木を植える。この花が無事に咲いたら、自分は恋人と結婚するという。そして、その日からせつせと桜の世話を始める兄。それを応援したいけど、応援すると兄が結婚してしまう。この狭間で揺れるもどかしい思いに日々悩む妹。そして、妹のそんな思いをよそに、その年の桜の季節、桜は花をつける。兄はその桜で栞を作り、妹に手渡す。兄は結婚を決心し、周りが囁し立てる中で、妹だけが取り残されたように孤独を味わう。それを慰めてくれたのは、彼女に好意を寄せる男だった。

三十分ぐらいだろうか。読み終わった俺は一つ息をついた。なんとも切ない話だった。柔らかい文体で、表現も豊かだった。描写も作風にマッチした淡い感じで、見事に一つの世界を描いていたといつて良いだろう。

この作品を読んで、俺は妙な既視感を覚えた。自分なりのアレンジはしてあるが、俺の中にある読み心地の中にそれは確かにあった。答えはすぐに出た。決して真似たとかではなく、ある種の尊敬に似た感覚を感じた。果たしてどこまで言うべきか、そんなことを考えながら、俺は終わりのページに書いてあった携帯電話の番号に電話をかけた。コールを待つ間に、色々と言いたいことを整理する。五度目のコールで繋がった。

「も、もしもし」

「ああ、こんばんは。藍沢です」

「あ、はい」

「ええと、昼間の作品、読ませて貰ったよ。感想を言いたいと思うんだけど、今はいいかな？」

「え、あ、あのっ」

「うん？」

「で、出来れば直接会ってお話を聞かせて頂きたいと、思うんですけど」

なるほど。俺はカレンダーを見た。当然だけど暫く満月堂の仕事が続く。まあ、白井さんがあの調子だからある程度流動的なことに

いつか.....

なるだろっけど。

「うーん、それじゃあね、明日の夕方。俺の仕事が終わってからとか」

「あ、はい。全然大丈夫です」

「えーと、それじゃあ、店のほうに来てくれる？一応六時には終わるから」

「あ、はい。分かりました。あの、よろしくお願いします」

「もちろん。真面目に話をさせてもらっよ」

「はい、それじゃ、おやすみなさい」

「おやすみ」

電話を切って、俺は大きく息を一つついた。向こうの緊張が移ったのか、なんとも息苦しい電話だった。会いたいと言ってくれたのは正解だったかもしれない。

いつか.....

第十三話

翌日、相変わらずぼんやりと和室に座る白井さんの姿があった。ぼんやり、最早虚ろと言っても良いかもしれないが、果てしない深みにはまっっているようだった。

俺は、その白井さんの前に鞆の中から出した封筒を置いた。

「何これ」

「若き小説家の卵の作品です。読んでみてください」

「うん」

まるで操り人形のように、こっくりと頷いて封筒の中から小説を引っ張り出し、白井さんはそれを読み始めた。

二十分ほどでそれを読み終え、顔を上げた白井さんにはちょっと生気が戻っていた。

「なかなか良い作品だねえ。文章の上手さや、表現の豊かさと言っ点ではなかなかのものだと思うよ。話の運び方もスムーズだし。全体的な構成とか、話の配分に煮詰めなおす余地はあると思うけど、うん、及第点を挙げられるんじゃないかなあ」

「大体俺の見解と一致しています」

「特に、妹の兄に対する想いの描き方ってのは真に迫ってるねえ」

そう言いながら、原稿をぱらぱらと読みかえす白井さん。

「これ、誰が書いたの？」

「赤城さんですよ」

「ふうん、大したものだねえ。一度賞に応募してみると、良いんじゃないかなあ」

そう言っつて、白井さんは原稿を揃えて再び封筒の中に仕舞い込もうとした。

「それだけでしたか？」

「え？」

「他に感じたことは？」

いつか……

「うーん、好意を寄せる男の子の描き方がちょっと雑かな」
それは確かにそう思ったけど。俺はため息を一つついて椅子に座りなおした。

「その作品、表現の使い方といい、話の展開のさせ方といい、文章の構成についてもそうですけど、ある作家の影響が多分に見えるんですよ」

「ある作家？」

「月夜満です」

俺がそういうと、白井さんは一瞬きよとした顔になった。それから改めて自分の顔を指差して、声に出さずに俺に聞き返してくる。俺は大きくはつきりと頷き返した。

「そうかい？」

「月夜満の一番の読者が言ってるんだから間違いないです。特に、妹の心象描写なんかはかなり。まあ、書き慣れていないから、多少は荒いみたいですけど。でも、多分月夜満の熱心なファンですよ」

白井さんは俺の言葉を聞きながら、改めて原稿を引っ張り出して読み返している。そんなに分からないものだろうか。まあ、表現の機微なんて人の匙加減一つだろうし、あるいは偶然と言うこともあるのかもしれないけど、何となく俺には確信のようなものがあつた。「ひよつとして、ここに本を売りに来たのも満月堂って言う店名に惹かれたのかもしれませんが」

そんな俺の言葉は既に耳に入っていないかのように、白井さんは原稿に没頭していた。先ほどとは違って、一枚ずつ、一行ずつ丁寧に読んでいる。その顔が微妙に緩んでいるような気がするのは、決して俺の気のせいではないだろう。

それから一時間あまり、白井さんは置物のように固まって原稿を読み続けた。仕方ないので、俺もカウンターに戻って、足元にストンプを持ってきて、文庫本を読みながら店番をしていた。

「いやあ、そうかあ。うーん」

原稿から顔を上げた白井さんがなんとも言えない声を上げながら

いつか……

背筋を伸ばした。

「赤城さんとこの後会って感想を言うことになってるんですよ。良かったらここでしましうか？作風の話とかします？」

俺の意地悪い問いかけに苦笑いを浮かべる白井さん。

「いやあ、勘弁してよ。出来ないよお」

「少しは元気になりましたか？」

「うん、そうだねえ。ありがとう、藍沢君」

「いえいえ、俺だって月夜満のファンですから。あの世界観とか作風は好きですよ」

「ああ、そうかあ。うん、ごめんねえ、ありがとう」

白井さんはそう言って、改めて俺に向かって頭を下げた。

「いえ、良いんです。また、面白い新作を書いてくださいよ」

「ああ、そうだねえ。うん頑張るよ」

そう言って、白井さんは冷えたお茶をぐいっと飲み干した。それから「新作を考えてくるよ」と言って、久しぶりに前向きな様子で和室を出て行った。

「それじゃ、今日はこれで失礼します」

「ああ、うん。ご苦労様」

「戸締りだけよろしくお願いします」

「うん、任せておいてよ。それじゃあ、作家の卵さんによるしくねえ」

六時になったので、戸締りを白井さんをお願いして俺は店のドアから外に出た。六時ともなるともう空は真っ暗だが、商店街には外套が煌々と点いている。丁度店の前に出たところで商店街を歩いてくる赤城さんの姿が目にとまった。

「こ、今晚は」

俺のほうに駆け寄ってきた赤城さんはそう言って軽く頭を下げた。

「今晚は。いいタイミングだったね」

俺もそう言って軽く頭を下げる。

いつか……

「さて、どこか喫茶店にでも入ろうか。それとも夕飯にする？」
「えと、喫茶店で。感想を聞きながらだと、ご飯が喉を通りそうにないので……」

随分と赤城さんは緊張しているようだった。何となく俺の方も緊張してしまう。白井さん相手に新作の感想を言うことはあったけど、それもあくまで雑談交じりだ。こんなに真剣に感想を言うなんて、しかも作者に直接なんて、よくよく考えてみれば初めてのことであった。

「えーと、じゃあ駅前の喫茶店にでも行こうか」

「あ、はい」

歩きながら、何となく周りを見回す。

「もう、すっかりクリスマスだね」

「そ、そうですね」

そういえば、赤城さんはクリスマスはどうするのだろう。ふと気になったので、聞いてみようとしたとき、商店街の向こうから高倉さんが歩いてくるのが目に入った。

「あ……」

隣で赤城さんも呟く。恐らく高倉さんを見て、からかわれた時の事を思い出したのだろう。

てつきり、ハイテンションで話し掛けてくるかと思われたが、高倉さんは何時になく真剣な顔つきをしており、早足でそのまま通り過ぎていった。どうやら俺達にも気付かなかったらしい。このまま行けば、行き先は当然満月堂だろう。

「なんか、真剣な顔でしたね」

「珍しい。雪が降るかも」

「クリスマスが近いから、丁度良いですね」

結局、そんな事を言って、余り気にとめなかった。それよりも今は赤城さんの小説の感想だ。

いつか……

第十四話

「……ということ、総合的に言つと面白かつたと思う。今言つた何点かを詰めなおせば、きつともつと面白くなると思うよ」

俺は十分ほどかけて、ひとまず自分の思ったことを率直に彼女に伝えた。妙に遠まわしな言い方をしたところで、最終的に言いたいことが同じならば率直なほうがいいだろう。手ひどい罵声を浴びせるわけでもないし。とは言え、ひとまず内容に関係も無かつたので、月夜満との云々については伏せておいた。

駅前の喫茶店は夕暮れ時にもかかわらず空いていた。まあ、学生は冬休みだからどっちかというと繁華街のほうに言っているのだから。仕事帰りのサラリーマンはわざわざ帰宅途中に喫茶店なんて寄らない。六時過ぎのサラリーマンが吸込まれるのは、赤提灯のぶら下がった店だろう。そう考えると、空いているのにも納得できる。

「……ありがとうございます」

俺の言うことを身じろぎもせず黙って聞いていた赤城さんは、聞き終わって先ず始めにそう言つて頭を下げた。

「凄く真面目に読んで貰えて嬉しいです」

「そりゃあ、適当に見えるわけにはいかないよ」

俺がそう言つと、赤城さんにはっこりと笑つた。それから一息をして、急に真面目な顔になった。

「この話は、ほとんど実話なんです」

赤城さんはそう言つてコーヒーを一口飲んだ。

「妹が私、兄は私の兄です。だから、ここに書いてあるのは、まさしく私の思いなんです」

俺は何も言えなかつた。読んでいる途中から薄々と感じていたからだ。

「この小説は、本当なら兄に見せるつもりで書いていたものです。桜の話も、結婚の話もそれから冒頭の幾つかのエピソードも全部本

いつか……

当。……だけど、嘘が二つ入っています」

「二つ？」

「はい、私に好意を寄せる男の人なんていなかったのと、兄は……兄は結婚できませんでした」

赤城さんの目が潤んで、一筋の涙が零れ落ちた。それを紙ナプキンで拭って、それから赤城さんは話を続けた。

「兄のことは茜ちゃんから聞いていますよね？」

「知ってたの？」

「いえ、何と無くそういう感じがしました」

「ごめん」

「いえ、いいんです。私の兄は一年前に交通事故でこの世を去りました。そのとき彼には結婚を決めた女性がいて、その人の為に庭に植えたのが御衣黄でした。初めて花をつけた御衣黄で、兄は私に栞を作ってくれたんです」

「そうだったんだ」

そんな栞なら、思い入れもあって当然だろう。

「結婚前に兄にこの小説を見せるつもりでした。私が兄にべったりなのを、兄も気にしていましたから。私は応援するよって言う意味もこめて。私自身の区切りとしても」

「そうか……。そんな思いの籠った小説を読ませてくれて、ありがとう。でも、そんな小説をどうして俺に？」

「私は、ずっと兄を引きずっていました。大好きな兄でしたから、振り払えなくて。兄がいらないなら、私はどうやって生きていけばいいのか。そんなことすら考えていました。けど、茜ちゃんはあの時もそうでしたけど、ずーっと傍で私を呼んでくれていました。一年かかりましたけど、ああ、私には友達がいて、私はまだ生きているんだなって。そう最近思えるようになってきたんです」

「いい友達を持ったね」

「はい、とても」

言いながら、赤城さんは本当に幸せそうな笑顔を見せた。

いつか……

「そんな茜ちゃんの勧めてくれた人だから……。それに、初めて満月堂で見かけたときに、少し兄と被ったんです。埃臭い本の中で黙って本を読んでいる姿が、何となく。この人も本が好きなんだなって、すぐに分かりました」

「そうだったんだ。それであの時、ちょっとぼおつとしてたんだ」
「お恥ずかしながら……」

照れた様に少し頬を赤らめる赤城さん。

「でも、今日、藍沢さんに読んで貰って本当に良かったと思います。私の書いた小説に、こんなに真剣に取り組んでくれるなんて、それだけでも嬉しかったです。信じてみて良かったです。」

「もし、赤城さんが今からでも小説家を目指すなら、俺は応援するよ」

「え？」

「俺は小説を書いたことないし、自分で書けるとも思わない。だけど、読むのは好きだ。読み手から言わせて貰うとすれば、赤城さんの小説からは心が伝わってくる。こういう小説を書ける人は、俺は素敵だと思う」

「あ、はい、あの、ありがとうございます……」
顔を真っ赤にして俯いて、消え入りそうな声で赤城さんはそう言った。

それから、少しの間色々な話をした。赤城さんのこと。俺のこと。全然関係のないこと。いろいろと話して、俺は楽しいひと時を過ごした。

「そう言えば、月夜満って知ってる？」

「あ、はい、大好きです。満月堂って名前を見て、いい名前だなって思っ入ったんです」

本当に好きなのだろう。月夜満の名前を聞いただけで、赤城さんのテンションが少し上がった。

「何となく、文章の感じが影響受けてるのかなと思ったから、もしかしてと思ったんだ」

いつか……

いつか……

「藍沢さんも好きなんですか？」

「うん、全部読んでるよ」

俺と赤城さんは月夜満の話で一頻り盛り上がって、それからお互いにお腹が減っていることに気づいて、喫茶店を出ることにした。

第十五話

翌日、白井さんは元気を取り戻していた。和室に座って、湯飲みを抱えている姿は一緒だけど、その雰囲気や顔つきは、ここ数日とは打って変わって明るい。

「今日は元気なんですネ」

「ああ、色々と悩みが取れてね。藍沢君もありがとう」

そういう白井さんの口調はすっかりいつもどおりだ。

「そういえば、高倉さんが昨日凄い勢いで店の方に歩いていくのを見かけましたけど、それも何か関係が？」

「ああ、まあね。うーん、まあもう隠すようなことでもないかな」

そう言って、白井さんはここ数日のことを話し始めた。

「そもそもきつかけは、彼女が原稿を取りに来たときのことなんだ。なんだか悩んでいるようだったから、聞いてみたんだ」

「ああ、それで長かったんですね、いつもより」

「そうそう、いまいち要領を得ないから、じゃあ今度ゆっくりって言ったら、本当に一日開けてくれて言われてさ」

「で、お店を休んだと。俺に電話をかけてきた日ですね？」

「そうなんだよ。そしたら、まあ、簡単に言々と家庭のことで悩んでいるって言ってる」

言いながら、白井さんはお茶を一口。

「まあ、旦那さんが子供が欲しいって言ったららしいんだよ。そうすると、仕事を休まなきゃならないからねえ。どうも彼女はそれが嫌みみたいだねえ」

「ははあ、キャリアウーマンですね」

「まあ、それだけじゃないんだけどね。彼女も色々と苦労して今の立場にいるからねえ」

「で、白井さんはなんて言ったんですか？」

「旦那さんが望んでいるなら、いいんじゃないのって。高齢出産は

いつか……

辛いらしいよって、言っちゃったんだよねえ。変わりに来る担当さんとも仲良くしとくからって、まあ最終的にはこれが余計だったんだけど」

「とうとうと?」

「つまり、彼女は自分無しで会社が動くのが嫌だったんだろってね。こっちは親切で言っただつたんだけど、もの見事に逆効果でねえ。物凄く怒っちゃって。まあ、色々ときついことを言われちゃってね」

きついことの詳細はあまり言いたくないようだった。まあ、あれだけ呆けている姿を見せられると、わざわざ聞かなくとも相当に堪えたのだろうということは分かる。

「だけど、昨日わざわざ謝りに来てくれてねえ。カツとなって言い過ぎたって。彼女、泣いちゃってね。とんでもない事したって。ただまあ、僕も向こうの事情を知らずに無神経なことを言っちゃったわけだし、それでチャラにしようってね」

実に白井さんらしい終わらせ方だ。白井さんは高倉さんが好きなのだろう。異性としてではなく、どっちかと言うと妹とか娘とか、そういうような扱いをしているような気がする。だからこそ、許せてしまうのだろう。何となく、そう思った。

「そうそう、藍沢君にもゴメンねって言ってたよ。絡んじやってって」

「ああ、はい。分かりました。気にしなくていいのに」

「まあ、旦那さんとも話し合っただつた。子供は欲しいみたいなので、考えてみるって言ってたなあ」

「高倉さんは、子供嫌いなんですか?」

「とんでもない。姪っ子を可愛がりすぎて、甘やかし禁止令が出されたほどの子供好きだよ。だから、本人も欲しいんじゃないかな。

板ばさみって奴だねえ」

「ははあ、大変なんですな」

「うん、何とかして上げられると、良いんだけどねえ」

いつか……

白井さんはそういつた後で、残っていたお茶を飲み干した。
「さてと、それじゃあ今日から本格復帰ってことで、遅れた分を取り戻さなくちゃ」

一つ伸びをしてから白井さんはそう言って立ち上がった。

「何かあつたら呼んでよ」

「はい、分かりました」

仕事場へ歩いていく白井さんを見ながら、俺はなんだかほっとした。

静かになった店の中で、俺は一つ息をついた。この所、妙に色々といイベントがあつたような気がする。しばらくは静かに過ごせるといいな。そんな事を考えた矢先だった。

「ハローー！！マイ、フレンド」

珍妙な英語で挨拶をしながら店に入ってきたのは明良だった。いつもどおりのラフな格好で、何故かサングラスをしていた。

「元気？今日もいい天気だね」

サングラスを外して明良は俺に向かってウインクした。こんなに気持ちの悪いものを見たのは久しぶりだ。

「確かにそうだが、俺はあんまり元気じゃなくなった。帰っていいぞ」

「いやいや、来たばかりだし」

「店で騒がれると、他のお客さんのご迷惑なのです」

「いないじゃん」

それはそうなのだが、せっかくしずかに過ごしたいと思った矢先に、知り合いの中でも煩いナンバーワンに出会ってしまったのだ。ウンザリもしようというもの。

「用は何だ？」

「うん、実は暇なんだ」

「俺は忙しいんだ。帰れ」

にべもなくそう言っつて、俺は文庫本に目を戻した。

いつか……

いつか……

「実は用事があるんだよ」

「帰れ」

「クリスマス・イブは暇でしょ」

「……その決め付け口調が不愉快だ。黙秘する」

「茜ちゃんがね、四人で食事しようよって」

人の話を聞かず、一方的に用件を伝えてくる明良。

「碧ちゃんはオツケーだって。裕也もオツケーだよね」

まあ、どうせ暇だ。一人で過ごすよりは多少賑やかなほうがいいかもしれない。

「わかった。何時にどこだ？」

「六時に駅の北側」

「つい最近、同じ会話をした記憶がある」

「デジャヴだね。実は僕もそう思ったんだ」

俺と明良はふと顔を見合わせてそれから同時に首を捻ったのだった。

第十六話

「かんぱーい!!!」

四人の声が綺麗に重なって、この間と同じ店でささやかなクリスマスの食事が始まった。

「この間は中途になっちゃったけど、今日はたっぷりさわごー!!!」
茜ちゃんがジヨッキを持ち上げて、そう叫んだ後にぐいっと一気に入中身を飲み干した。

「茜ちゃんかつこいいよー」

そう言って拍手するのは明良だ。俺と、向かいに座る赤城さんも一応拍手するものの、二人とも表情は苦笑い。

「茜ちゃん、無茶したら駄目だよ?」

赤城さんがおずおずとそういうものの、茜ちゃんはさらりと笑いかけて二杯目を注文する。

「僕は茜ちゃんに付いていくよ!!!」

馬鹿なことを言っただけで明良も一杯目のビールを胃に流し込んだ。

「明良!!! 素敵!!!」

「茜ちゃんも!!!」

手を取り合う二人。早速駄目な二人になりつつある。

「テンション高いですね、二人とも」

赤城さんは大根サラダを食べながら、その二人を笑顔で眺めている。

「まあ、毎度の事だけど」

俺の言葉に赤城さんも「そうですね」と頷いた。

「何?二人で内緒話?」

明良がぐるりと振り向いて俺のほうに寄って来る。手に持っているグラスは既に三杯目だ。

「うるせえ。お前は絡み上戸か」

「良いけどねえ。裕也は碧ちゃんのこと、お気に入りだもんねえ」

いつか.....

「ばつ、お前何言ってるんだ」

「照れるなよう。僕は照れないと言えるぞ。茜ちゃんが好きだー！」

叫んでグラスを一気に空ける明良。

「私も明良が好きい！！」

で、再び手を取り合う二人。付き合ってかられんな。いきなりの爆弾を食らわされた赤城さんは顔を真っ赤にして俯きつつ、ちらちらと俺のほうを見ていた。そういう視線を送られると、こっちも何だか恥ずかしくなってきた。

「あの、私……」

「ねえねえ、裕也さんは卒業後の進路とか決めているんですか？」

赤城さんが何か喋ろうとしたところで、茜ちゃんが割り込んできた。

「え？」

「来年、四回生ですよ？その後の事と違って、考えているんですか？」

「多分、満月堂にいると思うよ。俺、あの店好きだし」

「ずっとバイトで？」

「うーん、白井さんが正式に雇ってくれば、そういう立場からは抜かれるけどね」

残念ながら、今のところ白井さんにそういう話を持ち出されたことは無い。相変わらず値段のつけ方とかも知らないし、案外白井さんは俺をバイトから格上げする気なんて無いのかもしれないけど。

「明良は実家に帰るんだよね」

茜ちゃんは明良のほうに視線を移してそう言った。

「うん、約束だからね。でも、きつと迎えに来るからね」

「うん、待ってる」

三度手を取り合って見つめあう明良と茜ちゃん。全く持って大袈裟な二人だ。でも、この二人なら大丈夫なんだろうなあ。何となく、遠距離になって二人が分かれてしまふ絵が浮かばず、俺は漠然とそ

いつか……

んなことを感じた。

「茜ちゃんはどうするんだい？まあ、学生生活もこれからだけど」「うーん、取り敢えずお菓子の腕とかは上げて行きたいです。お店とかもてたら良いなあって思いますねえ」

俺が尋ねると、茜ちゃんは少し考えるような仕草を見せた後でそう言った。

「それなら、専門学校とかに行けばよかったんじゃないの？」

「いえ、一緒の大学に行こうねって言うのは、碧との約束だったの。卒業してからでも、行こうと思えば行けますしね」

そう言つて、茜ちゃんは赤城さんの腕をぐつと引つ張つた。赤城さんは恥ずかしそうだったけど、とても嬉しそうな笑顔を浮かべた。「で、碧ちゃんは？」

明良が尋ねると、赤城さんは躊躇いがちにおずおずと口を開いた。

「実は、小説を書いて賞などに応募してみようかな……と」

「おおー、学生小説家ー！」
明良がはやすと、慌てて赤城さんはパタパタと顔の前で手を左右に振つた。

「いや、そんなのは……。ただ、自分の実力を試してみたいなあ」と
恥ずかしげで、たどたどしいけど、はっきりとした決心を感じる言葉だった。

「碧なら行けるよお。私、俄然応援しちゃうから」

ぶんぶんと掴んでいる赤城さんの腕を振りながら、茜ちゃんはまるで我がごとのように喜んでる。

「うん、ありがとう」

腕を振られながら、赤城さんも嬉しそうにそう言った。

「俺も、応援しているよ」

「あ、ハイ……。ありがとうございます」

赤城さんにはっこりと笑って俺にそう言ってくれた。俺はその笑顔を真正面から見て、不覚にも胸の高鳴りを感じてしまった。それは、今までで一番可愛い笑顔だった。

いつか……

「それじゃねー。メリクリー」

「またね、碧。裕也さんその子をよろしく」

腕を組んで、明良と茜ちゃん、は雑踏の中に消えていった。店の前に残される俺と赤城さん。消えていく二人の背中を見ながら、二人で暫く経っていた。

「二人とも、幸せそうですね」

「ああ、あそこまでやられると、返って清々しい」

「ふふ、そうですね」

店を出たところで俺はそろそろ帰ると言った。赤城さんもそれに同調したので、分かれることになったのだ。

この間、食事が中途半端だったことに、ちょっとわだかまりを感じていたのだろう。茜ちゃんの企画でクリスマス・イブにわざわざ食事会をもう一度開いてくれた。けど、やっぱり二人で過ごして貰った方が良いのではないか。明良と茜ちゃんが同時に席を立ったときに赤城さんにそう持ちかけられた。俺は、一も二も無く同意した。

実際、明良は少し嬉しそうな顔が見えた。酒のせいもあるんだろうけど、分かり易いやつだ。

「それじゃ、帰りましょうか」

「……ああ」

俺達は、並んで駅のほうに歩き始めた。

「もう、応募する賞とかは決めたの？」

「いえ、まだ……。本を見たりとかして調べています」

「そうか。応募するのは、この間の？」

「いえ、新しいのを書こうと思っています。この間、藍沢さんに読んで貰った時から、何だか小説を書きたい気持ち湧いてきたんです。ストーリーも幾つか思いついたし。本当にありがとうございます」

赤城さんはそう言って、立ち止まってぺこりと頭を下げた。

いつか……

いつか……

「いや、俺は何もして無いよ。その気持ちは、赤城さんの中から湧いてきたんだから、最初から赤城さんの中にあっただ」

俺に小説を見せようと思ったときに、赤城さんの心の封印は解けていた。ただ、それを実感するのに少しだけ時間がかかっただけ。そういうことだと思う。例えば、暗いところから急に明るいうところに出たときに一瞬目が眩んで、それから徐々に慣れていく。損なようなものだったんじゃないかと思う。

「でも、やっぱり藍沢さんが真面目に向き合ってくれたおかげです」「そう言っただけで、光栄だけど。俺のほうこそ、素敵な小説を読ませてくれてありがとう」

「そんな。光栄です」

二人で少し笑って、それからまた歩き始めた。その時、空の上からちらりと白いものが舞い落ちてきた。

「あ、雪ですね」

「本当だ。道理で冷えるわけだ」

白い雪がちらつく道を、二人とも黙って少し歩いた。こちら側は結構賑やかなので、まだまだ人通りもそこそこあった。その大半がカップルで、傍目からは俺と赤城さんもそう見えているのかな、なんてことを考えてしまう。

「あの、また小説を読んで貰えますか？」

不意に赤城さんがそう言った。

「もちろん」

俺は即座にそう言って頷いた。

「じゃあ、頑張って書きますから、楽しみにしていて下さいね」

そう言って、赤城さんは力瘤を作るような仕草をしながら、にっこりと笑った。

第十七話 完結

冬が過ぎて三月。春の訪れを告げるように、日ごとに暖かさが増していく。近所の梅の蕾もそろそろ綻びそうだ。

俺は相変わらず満月堂のカウンターにいる。けど、今までとはちよっとだけ状況が違っている。この間、白井さんに正式に雇ってくれと話をした。

「藍沢君が望むなら、僕は歓迎だよ。でも、本当に良いのかい？」
白井さんは心配そうにそう俺に尋ねた。

俺が本気だと分かると、それじゃあ色々覚えてもらうからね、と言って嬉しそうに笑った。一昨日は本に値段をつける方法を教えて貰った。今日はその時のメモ書きを見ながら、無造作に積みあがっている本に値段をつけて整理するという作業をしている。白井さんが延々と溜め込んでいたおかげで、暫くはこの作業に忙殺されそうだ。長時間マスクをつけての作業はなかなか辛かったが、自分で値段設定してみるというのはなかなか楽しい。

「こんにちは」
涼やかな声でそう言いながら入ってきたのは赤城さんだった。

「いらつしやい」

俺はマスクを外して出迎えた。

「お忙しいですか？」

「まあね。オーナーが仕事をたっぷり溜めてくれていたから」

「先生はお仕事ですか？」

あれから、ちよくちよく赤城さんは遊びに来てくれる。吃驚させようと思っただけある日、月夜満が白井さんだと言うことを話したら、驚きのあまり気絶してしまったのにはこっちが吃驚させられた。

「うん、籠ってるけど、なんか用事？」

「いえ、別にそういうわけではないですけど。差し入れを持ってきたものですか」

いつか……

そう言つて、赤城さんは手に持っていた包みをこつちに差し出して見せた。和菓子屋の包みだった。

「美味しそうなお饅頭を見つけたんです。藍沢さんのもありますよ」「へえ、ありがとう。呼ぼうか。俺も呼ばれたいし。ちよつと休憩」

「あ、でも忙しいんじゃない？」

「大丈夫だと思つけど。……白井さん」

俺は和室の奥に向かつて大声で白井さんと呼んだ。ガタン、ゴトンと何かがひっくり返るような音が聞こえてきた。

「寝てたみたいだ」

「お疲れなんですね」

確かにそうには違いないだろう。けど、営業中に寝るのはやめて貰いたい。買取はまだ教えて貰ってないから、白井さんに頼むしかないのだから。

「まあ良い、上がつて。お茶入れるから」

「あ、はい、失礼します」

赤城さんは靴を脱いで和室に上がった。俺もエプロンとマスクを外して和室に上がり、キッチンのほうで手を洗う。

「なんだい？……あつ」

白井さんが和室に入ってきて、それから慌てて出て行つた。言うまでもなく、赤城さんの姿を見たからだ。赤城さんはおかしそうに体を震わせ、声を殺して笑っていた。客だったときには無関心だったくせに、自分のファンだと分かった途端に身だしなみに気を使おうとした。立派に手遅れだと思つけど。

「全く、何をやっているんだか」

貰つた饅頭を皿に移して、ちゃぶ台の上に置きながら、俺はため息混じりにそう言つた。

それから座つて、三人分の湯飲みにお茶を入れる。

「そう言えば、小説の進み具合はどう？」

「自分なりに結構順調です」

「どんな話？」

いつか……

「……それは、書きあがるまで内緒です。でも、実話を基にした話です」

「へえ、楽しみだね」

俺がそういうと、赤城さんはふと心配そうな表情を浮かべた。

「あの、読んでも笑ったり怒ったり引いたりしないので下さいね」

「もちろん。なんで？」

「それは……いえ、いいです」

言いかけて止められると余計に気になる。俺がもう一度尋ねようとしたとき、風が入り口のドアを強く揺らした。

「びつくりした……」

「春一番、かな？」

「そっか、もう春なんですネ」

赤城さんがしみじみと呟いた。

もうすぐ春休みが終わる。

赤城さんの小説は、どう言うのなんだろう。実話を元にしたといっていたけど、俺の出版もあるんだろうか。締め切りは四月らしいから、もう少しすれば読ませて貰えるかな？

そう言えば、明良の奴もいよいよスーツ姿で走り回るらしい。気楽に過ごしていたようで、下準備とかは着々と勧めていたようだ。

茜ちゃんはクッキングスクールのようなところに行つて、腕を磨き直すといっていた。

高倉さんは二月に無事御懐妊なさった。ギリギリまでは働くといつて旦那さんを冷や冷やさせているらしいけど。

そして俺は学生生活最後の年にして、ようやく先のことを見据え始めたという気がする。遅いか早いかは知らないけれど、これが俺のペースなのだろう。

それと……満月堂の店員以外に、一つ目標も出来た。

「赤城さん」

「はい？」

赤城さんは少し緊張した面持ちでこちらを向いた。

いつか……

「いつか……」

「いやー、ごめんごめん。恥ずかしい格好を見せちゃって」
俺の言葉は、ござっぱりとした格好に着替えてきた白井さんの乱入によって遮られた。

「……あれ、ひよつとしてお邪魔だったかなあ」

申し訳無さそうに後ろ頭をかく白井さん。

ふつと赤城さんが吹き出した。つられて俺も笑ってしまった。最後に白井さんが笑い出すと、なんだか緊張した空気はどこかへ言っ
てしまった。

「さっきの続き、いつか聞かせてくださいね……」

赤城さんは顔を赤らめながら、そつと俺に耳打ちした。

いつか……

第十七話 完結（後書き）

というわけで、完結でございます。

拙い文章でしたが、お付き合いいただきまして、ありがとうございました。

感想、ご指摘、その他なんでもご意見いただけたら嬉しいです。

いつか.....

いつか.....

PDF小説ネット発足にあたって
PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5244d/>

いつか.....

2008年11月7日08時15分発行